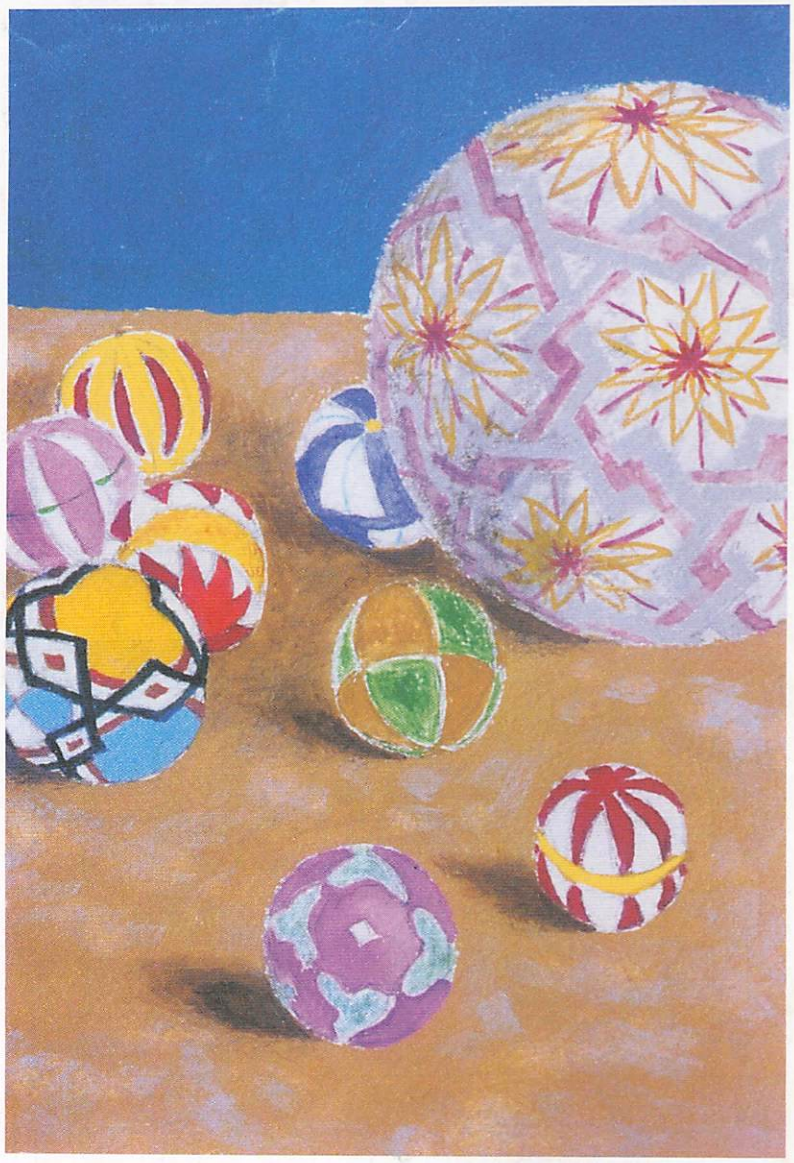
伝習館

東京同窓会会報

第2号 2003.7.1



激動期のテニス部物語
戦後の野球部顛末記

東京に輝ける三稜の星たち
実の兄と思っていた檀一雄
伝習館社研が生んだ世界の廣松渉
方言詩「2003春・郷愁」

表紙

題字は母校伝習館に掲出してある創立者立花鑑賢公の書の扁額の文字を、会長の江崎正直氏（高2）が臨書したもの。

絵は女流画家法坂（旧姓井上）純代さん（高12）の作品

・表紙――「柳川の毬（まり）」――ガッシュ、アクリル（27.3cm×18.5cm）
・裏表紙――「夏蜜柑」――ガッシュ、アクリル（33.3cm×24.2cm）
〃――「海の音」――ガッシュ（23.6cm×12.0cm）

法坂さん　略歴

昭和17年　福岡市生まれ
昭和34～35年　伝習館在学
昭和43年　東京芸術大学油画科卒
（前号　綿貫直諒画伯の一年先輩）
現在　共立女子大学非常勤講師

伝習館

東京同窓会会報

第2号 2003.7.1

東京同窓会本部より

賛助金ご協力の御礼と状況報告 ……編集局……2
東京に輝ける三稜の星たち
　東京同窓会の歩みーその２ー ……副会長　松永粛……4
総会へのご提供品あれこれ ……編集局……6
会員短信 ……編集局……8
ホームページへの来信紹介 ……編集局……10
新刊紹介 ……編集局……12
情報紹介ー白秋と城ヶ島ー ……ご提供・高１　高木陽二……13

先輩・後輩より

実の兄と思っていた檀一雄（檀一雄と私）……中53　古賀和典……14
廣松渉と宮川武寿・龍昇吉ーその人間関係の土壌ー
……中56　成清良孝……18
こらホンナコツ、聞いてハイヨ！　ヨカヤッカンモ
ー激動期の伝習館テニス部物語ーその１ー ……高伝１横山二三男……20
野球部顚末記ー１点で逃した甲子園ーその１
……高２　山田銀一郎……23
小田原時代の北原白秋と「白秋童謡館」……高５　下河秀行……26
「ふくの会」から……高５　野口幹彦……27
追憶のメリナ・メルクーリ　ギリシャあれこれ（一）
……高６　岡田哲也……28
ホンニ不思議じゃったばんも ……高７　田中敬之助……30
マリオネット ……高10　大村平人……31
ローマにて　2003年春……高14　綿貫直諒……32
夏の八甲田山ー父親の威厳は失われたー ……高21　白谷政則……32
方言詩「2003春・郷愁」……高23　坂本智臣……34

学年幹事より

くっぞこ会 ……高12　橋本寛治……34
高14回東京同期会のご案内 ……高14　吉田節子……35
高20回同期会案内 ……高21　白谷政則……35
募集 ……編集局……36
編集後記 ……〃……36
東京同窓会会則／東京同窓会組織図 ……〃……37

東京同窓会本部より

賛助金ご協力の御礼と状況報告　編集局

伝習館東京同窓会会報創刊にあたり、皆々様にはご支援・ご協力を頂きまして誠に有り難うございました。厚く御礼申し上げます。

未だ御協賛頂いていない方もあるようですから、用紙を同封致しますのでご協力をお願い申し上げます。

伝習館東京同窓会　　会長　江崎　正直

卒回	氏名
高1	木下浩二
高5	倉林千鶴子
高5	田尻充子
高10	石橋寿雄
高10	大村平人
高10	高島早苗
高16	沓掛純次郎
高16	近藤悦子
高21	石川節子
高28	川口進
協賛2.5口	
中55	江崎和夫
中55	吉弘尚正
中56	今山博文
女41	渋谷敏子
高2	広松敏克
高2	古村イツ
高3	村井タカ子
高5	諸藤仁子
高6	椛島孝之
高6	井上弘子
高9	橋本忠彦
高10	金納文子
高12	小野アケミ
高23	樋口貴美子
協賛2口	
中44	三砂安記
中49	森田安人
中50	広松親弘
中51	藤木正男
中51	塚本和吉
中53	吉岡昭三
伝1	永井俊一
女34	古賀弘子
女40	中野美智子
女44	後藤由紀子

卒回	氏名
高10	原田智昭
高10	内山秀生
高10	永倉素子
高10	平野紘子
高10	石橋博史
高11	久賀朝文
高11	徳永雄三
高11	鶴精三
高12	東若芳
高12	橋本寛治
高12	野田幸治
高12	野上一治
高13	田中利道
高13	原田万紗子
高13	馬場登紀子
高14	檀雅昭
高14	吉田節子
高14	今泉京子
高15	乗富眞則
高16	平野等
高18	平野令子
高16	田中文夫
高17	立花民雄
高18	緒方敬四郎
高18	緒方よし子
高19	江口吉男
高20	山田雄司
高20	海東信子
高21	千代島道生
高21	白谷正則
高22	蒲池寿美
協賛3口	
中46	前原弘
中55	木下宗治
中56	鬼丸敏男
女46	青木栄

卒回	氏名
高1	増尾義勝
高1	金原幸子
高2	堤陽太郎
高2	水上富美子
高2	吉川良平
高2	古賀苦住
高2	河野健一郎
高2	山下武
高2	石崎知見
高2	江崎洋二郎
高3	富重眞一
高3	西山彰
高3	今村繁隆
高3	新谷弘之
高3	田中初音
高3	角偉夫
高3	木村澄子
高3	森絹子
高4	池上正則
高5	古屋叡子
高5	津村寿人
高5	岸栄洋
高5	松永粛
高5	原田和幸
高5	田中禮二
高5	古賀弘
高6	戸上軍治
高6	服部尚子
高6	荻島直記
高8	池田孝人
高8	檜山宗子
高8	永倉正彦
高9	沖弘子
高9	堤悦夫
高10	江口武
高10	石橋邦博

卒回	氏名
協賛50口	
中48	宮本弘道
高2	江崎正直
協賛15口	
高4	新谷弘美
高10	立花寛茂
協賛10口	
中52	乗富光義
高2	小野善睦
高5	江口政司
高16	椛島正司
協賛5口	
中36	山崎年夫
中38	坪内肇
中41	西原真次
中42	吉開勝義
中42	山下伸二郎
中47	徳永樹夫
中49	竹迫健治
中49	堀江知教
中50	末松恭介
中51	寶珠山琢
中52	原田英治
中53	古賀和典
中54	武藤吉郎
中55	高巣和夫
中55	津末壱
中55	金森隆茂
中57	近藤営治
女31	跡部愛子
女41	五十嵐八千代
女43	田中美知子
女46	古賀弘子
高1	高木啓輔
高1	與田博利
高1	永江政勝

卒回	氏名
高11	田島龍子
高11	佐薙輝代子
高12	城戸ケイ子
高12	村上国子
高12	山田稔
高12	白尾邦久
高12	石田佳代子
高13	石橋正通
高13	松尾正孝
高13	荒木美智子
高13	宮川チヨエ
高13	原伸
高14	境サヨ子
高14	西山聆子
高14	浜尾淑江
高14	浦家史好
高14	岡田鶴子
高14	志田和子
高15	吉田トキヨ
高15	井上妙美
高15	岩崎雅子
高16	鈴木多鶴子
高16	清水サエ子
高16	川上春子
高17	松本重信
高17	宇木博巳
高17	中島功
高17	今津啓子
高18	石橋佐代子
高18	川口秀喜
高18	石橋純一
高18	井口文章
高18	福山博彰
高18	山下京一
高19	正岡喜則
高19	芹川季代子
高19	森田達雄
高20	高巣和登
高20	諸藤由美子
高20	近藤敬介
高20	井口ちづ子
高20	古賀柳治
高23	坂本智臣
高23	光橋一美
高23	竹内幸代
高23	平田真理夫
高27	東矢眞由実
高27	末次眞一
高27	松藤峯成
高27	石井美哉子
高27	塚元徳子
高28	石橋孝一
高28	吉開孝人
高30	木露純子
高32	本村智樹
高32	平山泰与
高35	山口英治
高38	武田信代
高38	荒巻能史

（5月26日現在）

卒回	氏名
高5	酒井弘子
高5	松尾久子
高5	松永悦子
高5	小山尊之
高5	中村義行
高5	今村直
高5	下河秀行
高5	安藤祥介
高5	岡升
高6	石橋修
高6	松本美香
高6	中島常浩
高6	石田澄子
高6	森時子
高6	森清旨
高6	佐藤晴美
高7	田中敬之助
高7	田中健次
高7	大津山砲三
高7	中澤貞夫
高7	古賀国利
高7	大藪成人
高7	高田四郎
高7	待鳥啓明
高7	具嶋和子
高7	永江嵩子
高8	海部章
高8	大村泰生
高8	木下清治
高8	嶋本幸子
高8	坂口加津代
高8	松本登四男
高9	原田光紀
高9	原田久美
高9	石橋淑子
高9	高口猛
高9	斉藤マスミ
高9	堤泰充
高9	岩丸純芳
高9	楢橋悠紀
高9	大越澄香
高9	福山幹子
高9	禱陽子
高10	吉開史朗
高10	井上紀子
高10	中村紀子
高10	大島喜代子
高10	松本英子
高10	東辰子
高10	松藤俊正
高10	古賀信義
高11	合田道子
高11	樋口守
高11	駒田サヨ子
高11	荒巻秋男
高11	秋永栄子
高11	柴田教子
高11	江口克子
高11	田北昌久
高11	近藤素子

卒回	氏名
中53	福村幹夫
中53	木下憲男
中54	林幹雄
中54	山田道保
中54	浅山親司
中55	古賀伸
中55	馬場淳三郎
中55	石橋正直
中55	小泉裕一郎
中55	武藤徳一
中56	井関義久
中56	成清良孝
中56	松本一郎
女31	林チセ
女35	原ヒサ子
女41	大藪美恵子
女42	西田艶子
女44	松本照子
女45	坂井敏子
女45	長崎和代
女45	松石貞子
女46	武井遊亀子
女46	片桐悦子
女46	三小田雪枝
女47	中富尚子
女47	桝田敕子
女48	北川留美
柳女	河野富美子
高1	古賀定愛
高1	高石満之
高1	渕上茂
高1	高木陽二
高2	大橋貞夫
高2	平河智
高2	内藤美祢子
高2	添島幸雄
高2	諸藤繁樹
高2	田中豊子
高2	井坂洋子
高2	上河京子
高2	徳安朔子
高2	上飯坂清子
高2	森多枝
高2	森清
高3	松竹紀子
高3	酒井清行
高3	長谷川千枝子
高3	臼井ヒロエ
高3	松崎美年子
高3	江口宏
高3	一郡辯
高4	塚本寿子
高4	山本瞳
高4	津留恒子
高4	高須信治
高4	石橋安男
高5	鈴木妙子
高5	家入智恵子
高5	林サツキ
高5	岸洋子

卒回	氏名
女45	西森沢子
女47	作山ミツ
女47	小端ヒサ子
高1	中野妙子
高1	野口富美子
高2	辻三二
高2	石橋慶孝
高2	鬼丸敦美
高2	池田国彦
高3	田島順次
高3	大坪利雄
高5	原タカ子
高5	田中起市
高6	城戸実
高6	待島清治
高6	池田勝嗣
高6	甲木康博
高7	松藤賢一
高7	龍久則
高7	福山さくら
高7	原田晃
高7	梅崎肇
高8	豊島黎子
高8	樋口綾子
高9	古賀弘子
高9	垣沼広忠
高9	三小田晋二
高9	木原茂樹
高10	古賀明美
高10	森永邦彦
高11	佐藤浩子
高13	内山岑生
高14	広田寛子
高16	水澤昭子
高17	長瀬和子
高18	中村易世
高38	田坂基子
協賛1.5口	
高4	高江茂子
高6	井手眞
高6	井手由紀子
高11	木下淑子
協賛1口	
中36	宝珠山徳
中38	高椋正雄
中40	川崎新三郎
中43	西村弥平
中46	西村亨児
中48	田中清陵
中49	松尾淳
中49	長崎哲夫
中49	淡輪晋
中49	河野秀行
中50	田辺一彦
中50	廣木亨
中50	三山心栄
中51	許斐淳司
中52	大内礼三
中52	富安喜久司
中53	深町昌弘

東京に輝ける三稜の星たち

「東京同窓会」の歩み―その2―

副会長　松永　肅

私が伝習館東京同窓会のお手伝いを始めたきっかけは、前年から事務方として旧在京柳川藩出身者の集まりの「みろく会」に携わっていたからであります。

今から30年前で昭和48年3月の例会の席上で、既に故人となられた伝習館の大先輩で、上司であったホテルグランドパレスの副社長総支配人の立花盛枝氏をはじめ、宮崎駒吉（元三菱電気社長）、河口静雄（元三共社長）の各氏から、久しく途絶えている伝習館東京同窓会を開きたいので手伝ってほしい、就いては「みろく会」の会員が手分けして在京の同窓生名簿を集めるとのことでありました。その時はじめて「みろく会」の名簿を預かり、記載されている人名を見て目を見張った。前記3氏が幹事として世話をしておられたが、既に故人なられた野田俊作、山崎　巌（元自治大臣）草葉隆円（元厚生大臣）、龍　断、荒木万寿夫（元文部大臣）、鬼丸勝之（元建設大臣）、山崎平八郎（元農林大臣）、上田卓爾（元三工社社長）、西田　敬、福山　寿、森春樹（元外務次官・英国大使）、古賀繁一（元三菱重工業社長）、本吉信雄（元婦人画報社長）、大坪藤市（元全酪連会長理事）、志岐義郎（元江川化学社長）、木村義雄（元日本石油社長）、安東守敬（安東省菴の末裔）、古賀義利（元龍保険事務所社長）の諸先輩の他に70名を越える錚々たる会員の名前が連なっており、改めて伝習館の伝統の重さを感じたものでありました。

翌日には、立花総支配人に役員室に呼ばれ、直筆で「みろく会」会員あての東京同窓会開催の趣旨と伝習館出身者を一人でも多くご紹介願うための次の依頼状を手渡され、これを明日にでも郵送してほしいとのことでありました。

拝啓　早春の候益々御静適に渉らせられお慶び申上げます。

扨て、母校伝習館高校東京同窓会は発足以来、毎年初夏の候に大会を開催して参りましたが、ご承知の通り母校の紛争等のためここ2・3年その事もなく過しましたことは洵に遺憾に堪えません。然るに其後郷里に於いても「伝習館を守る会」の発足に依り幾分正常に復しつつありますので此の際是非東京同窓会大会開催の要望が強くなって参りましたので皆様のご協力に依り来る5月27日（日）を期し開催の準備を進めて居ります。

就てはご多用中恐縮ではありますが右記の件ご協力を願い上げます。

敬具

記

1. みろく会員の方は名簿がありますので判明いたして居りますが若い方で住所が判明しない方が多いので在京伝習館出身者の住所氏名を一人でも多くのご紹介をお願い申上げます。
2. 近年卒業の在京者に関しては母校の方にも照会しておりますが、在京学生諸君の学校名住所氏名のご教示をお願い申し上げます。
3. なお4月10日までにご通知預けるよう願い上げます。
4. 事務局所在地

〒102
東京都千代田区飯田橋1―1―1
ホテルグランドパレス　内

昭和48年3月20日
伝習館高校東京同窓会
会長　宮崎駒吉
副会長　立花盛枝
副会長　古賀貞子

以上の原稿をあずかり、自室で内容を読みなおして困惑しました。3月20日即ち明日中にみろく会員に依頼状を発送することになっており、在京会員名簿の締切り日が約ひと月後の4月10日、東京同窓会の開催日は約2ケ月後の5月27日（日曜日）と言うスケジュールを見ただけで一瞬自信をなくしました。というのも私は一社員にすぎず、公私の別をどうつけるか、殊にこの期間は決算、株主総会・総会後の役員会、その関連業務、人事移動、新入社員教育、入社式の準備などスケジュールが一杯でありました。しかし、一旦お引受けしたからには全うせねばならず、徹夜状態で3月20日付の依頼状を郵送した記憶があります。

数日後から「みろく会」の会員や、会員の皆さん等から依頼をうけた同窓生、郷里の実家や、本校の先生方の大変なご協力を得て名簿が続々と寄せられて締切りの4月10日時点で約750名に達し、何とか案内状が発送できる名簿が集まったので、ひとまず安堵しました。しかしそれも束の間、案内状の発送、来賓への案内、当日の会費をどうするか見当もつかず、ハタと困り果てホテルのなかと言えども滅多に会えない立花氏に、約750名分の名簿の報告かたがた同窓会開催の段取りについて指導をうけて、簡単なスケジュールをつくり本格的な準備に入りました。しかしここで同窓会開催にあたり資金が全く無いことに気づき、これにどう対処するか考えあぐねたすえ、ホテルの総務部、経理部が発注している業者に、同窓会に係わる印刷の費用などの支払いを7月27日（日）の同窓会終了の翌日に支払う約束で協力をうることが出来ました。

次の問題が約750名におよぶ在京同窓会名簿をつぶさに調べて見ると、名前の重複が多数におよぶことが判明し、これをどうしてチェックするかでした。同窓会の開催日から逆算して案内状は少なくとも約ひと月前の4月末日か、5月の上旬迄ぐらいには発送をすませておく必要があり、そのための名簿の整理に日数を削

く余裕はなく、窮余の策として考え出したのが、とにかく集まった約750名の名簿を発送する封筒を全部書きあげ、それを「かるた取り」で整理することでありました。

先ず6日位で宛て名を書きあげ、その封筒を、「あ行」・「か行」・「さ行」の順に分類し、それを「あ」・「い」・「う」・「え」・「お」の順に並べ替えて、其処から重複した名前を抜き取りました。この方法は1時間半くらいで完了し、封筒のロスは45枚ぐらいで済み、一つの大きな難関をクリアした思いでした。

丁度この頃、「みろく会」の会員でもあり、中学44回卒の古賀義利（龍保険事務所社長）さんが心配して訪ねてこられ、推捗状況が順調だと言われ、安心されたご様子で、今後の段取りについて細かくご指導をいただき、この時ほど先輩の有り難さ、こころ強さ感じたことはありませんでした。

つぎに、案内状などの印刷物を出来るだけ経費をかけずに作成する必要から、印刷物の発注は返信用のはがきの印刷のみとし、本文の印刷は当時も大活躍していた謄写版印刷機を使用しました。案内状の内容はつぎのものでした。

新緑の候、いよいよご清祥にわたらせられお慶び申し上げます

さて伝習館高等学校東京同窓会をひさしぶりに左記のとおり開催いたすことになりましたのでみなさま、お誘い合わせの上ぜひともご出席くださいますようご案内申し上げます。

記

日時　5月27日（日）正午（12時）
場所　東京都千代田区飯田橋1−1−1
ホテルグランドパレス（九段下）
地下鉄東西線九段下駅下車
国鉄は飯田橋駅下車
会費　一般　3、000円
　　学生　2、000円
（会費は当日会場入口でお支払い下さい）
追ってご出席の有無を5月21日迄にご返事下さい

昭和48年5月8日

伝習館高等学校東京同窓会

以上の内容であり、この案内状と返信はがきを先に重複チェックが完了した封筒に3日間かけて封入し、5月8日付でなんとか郵送にこぎつけました。

今度は出席者がどれだけ集まるか心配でしたが、総会の経費をまかなうには、試算では最低125名以上の出席が必要であり、4月末発送予定の案内状が約1週間ずれこみ、とにかく速く目標の人数に達することを念じておりました。ところが先ず宛先・転居先不明の封筒が次々に返戻され、次に返信されてくる出欠はがきの10枚のうち出席者は3名たらずで、思ったより少なかったので、一時は経費の超過を覚悟しました。締切り日の5月21日の集計では、110名足らずでしたが、その後も総会の前日まで出席者が増え、最終的に目標の人数を確保する事が出来、おおよそ次の結果となりました。来賓5名、一般会員115名、学生11名で合わせて131名となりました。しかし、欠席者242名、宛先・転居先不明101名、返事無し281名などの多数にのぼり、次回の開催に大きな課題を残した気がします。経費においては、おおよそ収入では会費367、000円に祝儀25、000円を加え392、000円となり、支出が案内状・通信費などで約80、000円、懇親会費・会場装飾費などを含め約270、000円、来賓のお土産10、000円、雑費用20、000円位で、差引きおよそ12、000円を次回に繰り越すことが出来て何とか使命を果たせて安堵した記憶があります。

総会当日には、会場の手伝いに古賀義利先輩をはじめ、諸先輩のお声がかりで大勢の若手同窓生に協力いただき、無事に総会を開催することが出来ました。

来賓には、川島欣一校長、中村岩次郎同窓会長、古賀杉夫元柳川市長、古賀肇柳川高等学校校長、高崎　武「伝習館を守る会」会長の5氏をお迎えして、盛大に開催されました。その総会では、世間を騒がせている母校で問題の3教師による偏向教育が未だ癒えず、学校を正常に戻す目的から、父母教師が一体となって結成された、「伝習館を守る会」の趣旨説明と、その成果の報告がテーマとなりました。東京同窓会の有志もその趣旨に賛同し、多額の協賛金を集め協力を惜まなかったようであります。

その結果、「偏向教育の傷跡は当分尾を引きそうではあるが、少しずつ平静さを取り戻しつつある」との説明がありました。

久し振りの同窓会のせいか、懇親会は大変な盛り上がりようで時間を忘れて談笑が続き、止むを得ず閉会時間を30分延長したほどでありました。

翌、7月18日の「みろく会」の例会で立花氏から今回の同窓会の結果報告がなされ、宮崎駒吉同窓会会長はじめ会員の皆さんも大変満足されたご様子でした。当時は「みろく会」の会員の殆どが伝習館の同窓生で占められており、本校の情報は会員を通じて入ることも多く、自ずと東京同窓会の幹部会的機能を果たしていた時期でもありました。

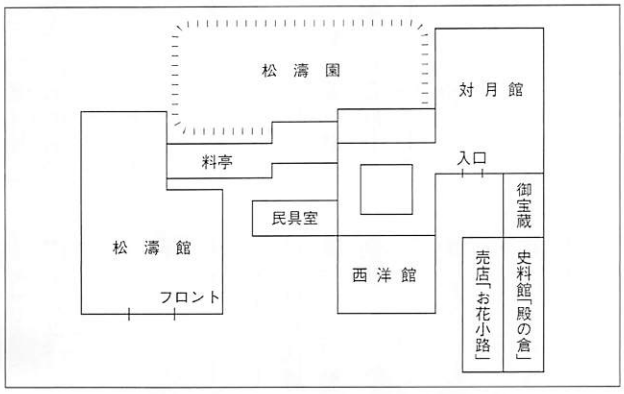
総会への ご提供品あれこれ

一、御花ペア宿泊券

ご提供者―高10回 立花寛茂（株式会社御花）様

ご利用料金

宿泊（一泊二食付）……15,000 ～ 25,000 円（税別）
料亭……5,000 円～（税・サ別）
柳川名物／うなぎせいろむし・有明海会席
御見物　殿の倉……500 円
　　松濤園・西洋館……420 円
　　共通券……700 円



殿様屋敷の料亭旅館（国登録、日登録）
柳川 古花
〒832-0069 福岡県柳川市新外町1 ☎0944(73)2189
大駐車場完備（有料） FAX 0944(74)0872

二、書籍

ご提供者―高17回 立花民雄（株式会社御花）様

『水の構図』2冊／『思い出』2冊／『柳川の殿（とん）さんと呼ばれて…』10冊

三、株式会社岡本商店・花ござタペストリー・花ござランチョンマット 各5枚

ご紹介者―高21 白谷政則 様

ご提供者―株式会社 岡本商店
柳川市下田町一一九三一三
☎ 0944-73-2501
FAX 0944-74-1517

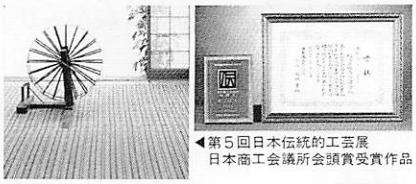
筑後の自然から生まれ、時の流れに磨かれた花ござの美・掛川織。

■手織りの味を現代に生かして

掛川織の特徴は、最上のい草を高い密度で織り込んだ重厚な肌ざわりと、染めの良さをそのまま生かして、主に横糸のい草の色で模様を作っていくシンプルな美しさとにあります。かつてこの地方では、農閑期ともなればどの家からも手織りの"ござばた"の音が響いていましたが、掛川を織れるのは特に力量のある織り手さんだけでした。今では他の伝統工芸品と同様、手織り掛川はごくわずかの継承者を残すのみとなりました。しかし独特の動力織機の開発や伝統の誇りに支えられた厳しい品質管理は、掛川織に、いま、地場産業としての新しいいのちを吹き込むことに成功したのです。

■柳川、緑濃き、い草の郷

詩人白秋を育み、柳と白壁の風情が今なお人を魅了する柳川のクリーク（水路）。この縦横に走るクリークがつくる豊かで潤いのある地味は、まさにい草にはうってつけでした。栽培法が伝えられたのは1592年、全国行脚中の僧によるもので、以来390年、柳川地方は県下随一のい草生産地となりました。福岡県が全国第2位のい草生産県であり、特に花ござに関しては抜きん出たトップの地位（全国生産の60%）を誇ることを考えると、立花12万石の城下町柳川を中心に掛川織という逸品が花開いたのも、けだし当然かもしれません。



◀第５回日本伝統的工芸展
日本商工会議所会頭賞受賞作品

■注目される伝統の美と技

昭和33年	福岡県無形文化財指定
昭和34年	皇太子殿下御成婚献上
昭和51年	第23回日本伝統工芸展（文化庁主催）入選
昭和55年	福岡県特産工芸品（民芸品）指定
昭和56年	第５回日本伝統的工芸展（伝統的工芸品産業振興協会主催）日本商工会議所会頭賞受賞
昭和57年	全日本トレードフェア優秀賞受賞

三

柳川の女たちは心をこめて花ござを織った。「掛川」はとりわけ技のたつ人の誇らしさが生んだ逸品だった。手堅くすっしりと重いこの織りこそ、おもえば豊沃な土地に根づく女たちの愛と情けの楽譜であった。そこに生を享けた私は機織りの音をゆりかごの唄として育ち、詩の世界にいざなわれて今にいたっている。ふるさとの「掛川」の味わいを全国に分けてあげたいと念じてある。

松永伍一

■詩人　松永伍一略歴
昭和5年4月22日、福岡県三潴郡大木町生。八女高校卒業後、中学校教師となり子供たちの生活詩の指導をするかたわら文学活動に入る。昭和32年4月上京して文筆生活に入り、谷川雁、黒田喜夫らとともに「民族詩人」を執筆。一時、新日本文学会、アジア・アフリカ作家会議などに属したこともあったが、辞退し今日に到る。著書は「日本の子守歌」「日本農民詩史」「松永伍一著作集」「鮮烈な黄昏」「落人伝説の里」等多数。

■花ござの宝庫、柳川に生まれた掛川織

ここ柳川地方では、い草の栽培が昔から盛んで、特に花ござに適した品種がよく育ちました。江戸時代から織り続けられ、多くの技法と伝統を持つこの地方のあでやかな花ござの中にあっても、ことに重厚な美しさで頂点をきわめる掛川織が誕生したのは19世紀半ば。東海道掛川宿での葛布（くずぬの）の技法に学んだからとも、川の字のように3本の縦糸（たていと）を掛けたからともいわれていますが、風にとばされ川に落ちたのを竿に掛けて乾かしたから、といういかにもおおらかな説にもまた、捨てがたい味が感じられます。

一

四、まる江の味噌・まる江のしょんしょん　各12

ご提供者―高34　永江隆志（マルエ醤油株式会社）様
ご紹介者―高14　吉田節子様

マルエ「しょんしょん」について

―永江　隆志

「しょんしょん」とは、福岡県筑後南部地域および熊本県北部地域で食されているおかず味噌（なめ味噌）の呼び名です。マルエの「しょんしょん」は粒選りの大豆と大麦・生醤油のしぼり汁を加えたぜいたくな味と高い栄養素が特徴で、独特の旨味と甘味をもち、地元の方々に愛され続けているロングセラー商品となっています。

さて、「しょんしょん」という一度聞いたら忘れられないこの名前の由来については、九州の各地で同様のなめ味噌を「醤油の実」または「しょいの実」と呼ぶことから「しょうゆ＝しょい」が語源ではないかという説はありますが、確かなことは分かっておりません。昔は武家屋敷で非常食として愛好されていたといわれています。

最後に味噌にまつわる小噺を一つ。

街道筋をこも包みの味噌を背にした馬が引かれて行く。旅人同士の喧嘩騒ぎに驚いた馬が馬主の手を振り払って一目散に走り出す。見失った馬主が、畑仕事の農夫に「みそを乗せた馬を見なかったかい」と尋ねると、農夫は笑って「おら、まだ馬の田楽は、食ったことも見たこともねえ」……お後がよろしいようで。

マルエ醤油株式会社
三池郡高田町大字江浦町一八九
☎　0944-22-5821
FAX　0944-22-5181

外箱・幅(cm)	外箱・奥行(cm)	外箱・高さ(cm)	ケース入数
28.0	22.0	13.0	12
商品サイズ	幅5.8×奥行7.3×高さ10.9cm		
JANコード4902839 209455			

外箱・幅(cm)	外箱・奥行(cm)	外箱・高さ(cm)	ケース入数
31.0	22.0	10.5	12
商品サイズ	幅10.0×奥行10.0×高さ4.8cm		
JANコード4902839 209172			

創業当時の看板

五、株式会社高橋商店　有明海の珍味「貝柱の粕漬」・うなぎ　各5
寒天こんぶのり玉はまぐりセット　20セット

ご提供者―株式会社高橋商店　様
高橋明良（高7）　高橋努武（高36）
高橋　徹（高39）　高橋　理（高43）
ご紹介者―高20　高巣　和登　様

わが社の商品について

ご承知の「味の有明漬」がメインの売れ筋ですが、新商品の各種うなぎ製品がここ数年大変高い評価を得て売り上げが伸びて来ております。東京同窓会の皆様には、まだ余りお馴染みがないと思いますので、二～三紹介致します。

高橋　徹（高39）

冷蔵蒲焼き1、500円（専用タレ150円）／冷蔵うなぎ押寿司1、000円
冷蔵素焼き1、500円（専用タレ150円）／冷凍うなぎ笹巻き2、000円他
冷蔵蒲焼き素焼きセット5、000円／冷凍セイロ蒸し1、500円
冷凍セイロ蒸しセット3、000円
冷凍セイロ蒸しセット＋はまぐりの吸い物セット5、000円　等々

株式会社高橋商店
山門郡三橋町垂水一八九七―一
☎／代　0944-73-6271
FAX　0944-74-1212

直営店舗
柳川店　☎0944-73-6221
柳川駅店　☎0944-72-0829
大川店　☎0944-87-1910
大牟田店　☎0944-56-6548
観光売店　☎0944-73-6271
工場直売店　☎0944-73-6271

伝習館東京同窓会賛助金
振込票通信欄コメント

中学36回卒（昭4年）宝珠山　徳
前会長江口三千雄氏と同期昭和4年卒の古木です。2度の応召で、日中戦争、大東亜戦争（後の第二次世界大戦）参戦して、戦争が如何に害悪であるか、参戦して平和のありがたさを喜んでおります。

中学41回卒（昭9年）西原　真治
（内　恒子）
中学伝習館（41回卒）を誇りにして居りました西原真治は昨年（7月4日）86才にて永眠致しました。生前は皆様に大変お世話になりました。お礼を申し上げます。葬儀の折りには北原白秋の作詩の曲　からたちの花　帰去来等を静かに流して頂きました。ご盛会を祈りながら感謝の印までに。

中学42回卒（昭10年）吉開　勝義
同窓会の発展をお祈り申し上げます。賛助費として送金いたします。小生、本年数え年で87歳、今後の御連絡は不要でありますので宜しくお願い申し上げます。

中学44回卒（昭14年）三砂　安記
高女42回卒（昭19年）三砂　小治（山田）
二人分送金します。会報も一家に2冊いりませんので三砂安記1冊にして下さい。

高女31回卒（昭6年）跡部　愛子（古賀）
大変お世話様と感謝御礼申し上げます。どうぞよろしく御願いいたします。

高女35回卒　原　ヒサ子
少額で恐縮ですが一口のみ送金します。伝習館東京同窓会々報の前途を祝福致します。用紙や印刷は勿論、内容も盛沢山で立派に出来上がりましたね。主人は大牟田市の三池中学（元三池高校）出身ですが、自分達の同窓会東京支部にもこんな会報が欲しいなあと羨ましがっております。

中学48回卒　田中　清稜
東京同窓会のご趣旨に賛同し、今後とも益々のご発展を祈ります。

中学48回卒　宮本　弘道
活発な同窓会役員の皆さんの活動に感謝申し上げます。今度の同窓会誌は立派な出来でした。中学伝習館の卒業生は殆ど古希をこえる世代です。会誌は大きな楽しみの一つです。ますます内容を充実させて戴けたらとお願い申し上げる次第です。　感謝

中学49回卒　松尾　淳
些少ですが賛助金振り込みます。お許し下さい。なお　次回からは当方、直接、毎年1月に振込みますので会報等のご送付は必要ございません。同窓会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

中学50回卒　廣松　親弘
委員の皆様大変御苦労様です。益々の発展を祈ります。

中学50回卒　田辺　一彦
田辺ミツエ（柳川高女045）850
005200は妻で住居同一ですから、事務連絡、会誌等は田辺一彦のみにして下さい。併記でも結構、経費節約を兼ねて。

中学51回卒　寶珠山　琢
会報ありがとうございます。

中学54回卒　武藤　吉郎
伝習館東京同窓会会長　江崎正直様
このたびの東京同窓会会報発行を心からお喜び申し上げます。

中学55回卒　高巣　和夫
中55で欠席勝ち乍ら会員の末尾に名を連ねています。旧東京同窓会に数回で三工社事務局長（？）の長江さんから、〝余り欠席すると先輩と雖も除名するバンモ〟と勝を入れられた事もあります。此度、装いを変えて発会したのを期して会報が発刊され心からお慶び申し上げます。
創刊号を祝し、遅くなりましたが宜しく。

中学56回卒　成清　良孝
いつもお世話さまです。
会報、ありがとうございました。よくできていますね。小野編集長の力量、抜群です。

高女41回卒　大藪　美恵子
東京同窓会会報いろんな事をよませていただきありがとうございます。お世話様でした。

高女46回卒　片桐　悦子
お世話様でございます。よろしくお願致します。

高校1回卒　淵上　茂
同窓会報創刊号ありがとうございました。益々のご発展を祈っています。

高校2回卒　堤　陽太郎
伝習館東京同窓会　賛助金協賛をさせて頂きます。

高校2回卒　江崎　正直
皆さんのご協力により会報が継続して発行されることを期待しています。

高校2回卒　水上　富美子
東京同窓會会報　創刊御目出度うございます。
ほんの心ばかりですが、お役にたてて頂ければと思い、お送り申し上げます。

高校2回卒　廣松　敏克
あけましておめでとうございます。東京同窓会会報　早速拝見いたしました。江崎会長の同窓会発展への取組・ご努力に敬意を表します。
会の益々のご発展と会員皆様のご健勝をお祈りいたします。

高校2回卒　徳安　朔子
東京同窓会誌　発刊　おめでとうございます。
益々の御発展を祈っております。

高校3回卒　西山　彰
「伝習館東京同窓会会報」創刊号の発行　誠にお目出度うございます。創刊号に相応しい沢山の情報が盛り込まれており、柳川と東京の距離が近くなります。江崎会長さんのもと会員の皆さん方の結束の固さが証明されました。少額ですがお受取り下さい。
〝為すべし為すべし我等友あり〟伝習館東京同窓会の益々の発展を祈ります。
江崎会長さまへ。
（伝習館同窓会　顧問　西山　彰）

高校3回卒　松竹　紀子
同窓会会報懐かしく拝見致しました。53回卒の松竹光典と一緒ですので高3の松竹紀子のみ一冊で結構です。実家の坂田が小野様には大変おせわになっております。どうぞよろしくお願い致します。

高校3回卒　田中　初音
立派な「東京同窓会報」楽しく拝見させて頂きました。皆様によろしくお伝えくださいませ。

高校4回卒　池上　正則
東京同窓会の更なる発展と江崎会長を中心とする新役員のご活躍を期待します。賛助金を送ります。

高校4回卒　古賀　信義
お世話様です。
2003年1月創刊号楽しく読ませていただきました。有難うございました。

高校5回卒　林　サツキ
幹事の皆様ごくろうさまです。
素敵な会報ありごとうございました。会費少なくて申し訳けございませんが……

高校5回卒　今村　直
同窓会報・創刊号をお送りいただき、ありがとうございます。わずかですが賛助学1口2,000をお送りします。

高校6回卒　松本　美香
いつもご活動厚くお礼申し上げます。この会の更なる発展をお祈り申し上げます。心ばかりですがご受納下さい。

高校6回卒　森　時子
なつかしく読ませていただきました。お世話さまでございます。

高校6回卒　大津山　砲三
「伝習館水泳部の最も輝いた日」の記事。興味をもって読ませていただきました。親父の名前が出て来て懐かしく思いました。有り難うございました。

高校8回卒　池田　孝人
松永様ご苦労様です。

高校8回卒　坂口　加津代
東京同窓会会報創刊、ご苦労さまでございます。
次誌を楽しみにしております。

高校8回卒　樋口綾子
役員の方　お世話さまでございます。

高校8回卒　檜山　宗子
伝習館高校第8回卒業生と同級、転居の為一年在校で、東京都立松原高校に転校致しました。

高校10回卒　大島　喜代子
創刊号嬉しく拝見いたしました。編集・企画御苦労さまでした。次号また楽しみにしております。

高校10回卒　永倉　素子
大へん遅れて申し訳ございません。幹事がこれではペナルティを受けなければならないと覚悟していますが……

高校14回卒　境　サヨ子
お世話さまです。
一口で申し訳ありません。宜しくお願い致します。

高校14回卒　西山　聆子
創刊号楽しく拝読いたしました。
多くの方のご努力が伝わってまいります。次号を期待しつつ……

高校16回卒　平野　等
高校18回卒　平野　令子
立派な会報が出来上がり皆様の御苦労がしのばれます。世帯は一緒ですので一冊で結構です。
（二人分別々に送られて来ましたので）

○高校18回卒　中村　易世
会報有り難うございました。
原田万紗子様へ
万紗子さんと同級だった中村とし子の妹です。巣鴨のアーバンプランの佐々木さんのオフィスの一部をお借りしています。

高校18回卒　福山　博彰
H14年7月の同窓会は大変ありがとうございました。東京同窓会誌も楽しく読ませて頂きました。小生、特に東京同窓会への入会手続きはしておりませんが、何かお出しする書類等がありましたらお手数乍ら自宅にご送付下さい。　以上

高校20回卒　山田　雄司
伝習館「東京同窓会会報」創刊号の発行おめでとうございます。益々の充実をご期待申しあげます。

高校20回卒　海東　信子
暦のうえでは春となりましたが、まだまだ寒さは厳しいものがあります。「会報」とても楽しく、又懐かしく読ませていただきました。これを機会に東京同窓会に関心を持ってくださる方が増えたらいいなあと願っております。次号が届くのを楽しみにしております。最後になりましたが、編集委員の皆様ほんとうにごくろうさまでした。

高校21回卒　千代島　道生
創刊号おめでとうございます。京都への単身生活も2年が経過しました。

高校27回卒　松藤　峯成
なつかしく拝読させていただきました。（マジック峯成）

高校45回卒　松石　貞子
この度は、会報を御送付頂きまして有り難うございました。大変なつかしく拝見致しました。

高校6回卒　森　清旨
会長初め幹事の方々には公私にご多忙の中を伝習館東京同窓会運営にご苦労いただき、また立派な会報までも発行され、名実ともに充実した小窓会となってきました。有り難うございます。役員幹事の皆様にはこれからもお世話かけますが何とぞ宜しくお願い申し上げます。

高校7回卒　大藪　成人
昭和31年卒（高校）の大藪です。
会報（創刊号）楽しく読ませていただきました。

中学53回卒　古賀　和典
先日の幹事会お疲れさまでした。頂いたお土産、美味しいチョコレートに何と10冊の会報、しかもその中には全部寄附金のお願いと払込用紙が入っているではありませんか！　まるで「チョコレートだけ食べて寄付の方は無視するんじゃないでしょね」と言わんばかりの原田副会長の顔が浮かび咄嗟にペンを取りました。「少類ですが、これにてご勘弁を、姫ィーさま」

高女42回卒　西田　艶子
此の度は、同窓会報を送って頂きまして、どうも有難う御座居ました。懐かしく拝見させて頂きました。

高校7回卒　待鳥　啓明
高7回　田中敬之助の紹介です。
関西支部　高7回　待鳥です。よろしく。

高校23回卒　樋口　貴美子
大変遅くなりまして申し訳ございません。

高校7回卒　具嶋　和子
東京同窓会の更なる御発展をお祈り申し上げます。

高校21回卒　石川　節子
いつもお世話様です。
宜しくお願い致します。

高校10回卒　石橋　博史
遅くなりましたが送ります。
同窓会報ありがとうございました。

中学56回卒　今山　博文
毎日、約一時間位健康のため歩いております。コースは眼の前にある1.双子山、2.葉山国際村、3.逗子披露山より海岸コース、皆さんもお出かけ下さい。富士がよく見えます。

高女44回卒　松本　照子
同窓会々報有難うございました。
おそくなりましたが、2、000円お送り申し上げます。

高女46回卒　古賀　弘子
同窓会にもご無沙汰ばかり申し上げて居りますが同窓会々報、その他の情報で装いも新たな東京同窓会が元気に発足したことを実感し、嬉しく思って居ります。実は柳川と我が家に病人が出まして年末からせわしくして居りましたので賛助金の納入が遅くなり申し訳ございませんでした。

高校3回卒　森　絹子
江崎さま、松永さま、創刊号おめでとうございます。東京同窓会のご発展をお祈り致します。

高校3回卒　村井　カタ子
お正月には東京同窓会会報をお送りくださいましてありがとうございました。
高校時代（水泳部の輝いた頃）を思い出しながら楽しく読ませていただきました。更なる会の発展を祈りつつ賛助金（5、000円）を送らせていただきます。

高校1回卒　高木　陽二
○同窓会報お送りいただき有りがとうございました。
○遅くなりましたが1口だけ賛助金を納めさせていただきます。
○江口正直会長によろしくお伝え下さい。

高校15回卒　岩崎　雅子
遅くなりました
1口ですが協力させていただきます。

高校7回卒　永江　嵩子
伝習館7回卒（昭和31年）の永江（淵上）嵩子です。現在老親介護のため下記住所に帰省中ですがいずれ横浜に返って来ますので、準会員として取りあつかっていただけたら幸いでございます。
よろしくお願い申し上げます。

高校10回卒　石橋　寿雄
10回卒3年9組のクラス会を3月1日に柳川の御花で催しました。東京同窓会報を送っていただきましたので出席者に配りました。会の残金より小額ですが事務通信費として寄付することに幹事で決めました。
10回卒3年9組長尾寿彦先生組からです。

高校10回卒　吉開　史朗
振込みが遅れてすみませんでした。
5月の観音崎での同級会に出席できずに残念次回もご案内下さい。よろしく。

ホームページへの来信紹介

伝習館東京同窓会のホームページ管理人の山口です。

ホームページを開設して約半年経過しました。その間のアクセス件数は900件に上りました。その間、各年代のOBの方より励ましのメールを頂戴しました。

3月から「OBに訊く！」との題でアンケートを募集しました。

質問内容は以下の通り

Q1 ご家族構成は？

Q2 どんなお仕事ですか。ご苦労された点、充実感を感じる点は？

Q3 お住まいは？近所にお薦めスポットはありますか？

Q4 柳川を離れてどれ位ですか？

当時の心境を思い出すと？

Q5 現役の生徒に対してのアドバイス（苦言）をお願いします。

Q6 その他（マイブームなど）

回答の御紹介です。

川崎悦子（8回卒）さん

こちらの家族は主人と子供三人と私です。

子供たちはそれぞれ家庭を持ち、今は主人と二人だけの生活です。

4年前、主人はリタイヤして、のんびりした生活をしていますが、私は、まだ自分のしたい仕事をしています。今年65歳になり、老人の仲間入りかとも思いますが、まだまだ、やりたいことがあり、頑張っています。東京に来て40年たちました。いろいろありましたが、夢のような速さで過ぎたと思います。一番幸せだったことは、今まで健康でいられたこと、いい子供たちに恵まれたことだと思います。勿論いい主人もです。皆さんも健康に御留意され、お過ごしください。

酒見和平（24回卒）さん

Q1 妻一人、子供二人。

Q2 ゼネコン 仕事を理解するまでが苦労した点。建物が良く出来たときが充実した時。

Q3 埼玉県鴻巣市。熊谷の花火大会はすごいと思います。

Q4 25年。期待と不安が一杯でした。

Q5 東京はいそがしかばってん、面白かばい。

鶴田寿徳（昭和55卒）さん

Q1 妻、長男（8才）。

Q2 調理師。就職後、東京で約13年、その後オランダに来て、オランダ人と仕事をしていますので、現在の職場のことを考えると、言葉の問題がはじめのうちはありましたが今はそれより、感覚の違い、メンタリティーの違いに苦労しています。充実感は特に挙げることは無いですが、家庭と職場が近いこと、家庭を大事にすること仕事優先ではないところ、が日本人と違って、驚いていますし、良い意味で、見習うところと思っています。

Q3 オランダ、アムステルダム市内です。

Q4 今年で23年目になります。海援隊が〝おもえば遠くへ来たもんだ〟といううたを歌っていましたがまさにあの心境ですね。

Q5 まさかこんな所まで来るとは思ってもいませんでしたが、夢、目的を持って、勉強して欲しい、生活して欲しいと、自分の反省を込めて、つよーく思っています。世界は広いですから、大きな事に向かって欲しいと思います。そして、語学を勉強して欲しいと、思います。

Q6 病気になってから、妻の代わりにコンピューターの購入、取り扱いを担当するようになりました。はじめは、ちんぷんかんぷんでしたか、今では何とかこなせるようになりました。おかげで、インターネット、ゆびとまを知ることが出来ました。今はデジカメに凝っています。

福島雅規（1989卒）さん

Q1 妻と2人。

Q2 2002年にコンピュータシステムのコンサルティング・設計・開発を行う会社を設立しました。やはり、会社設立は苦労が多いもので顧客の開拓や人材の育成等に大変苦労しました（してます）。しかし、自分がやりたいことを組織に呪縛されることがなくできますのでやりがいがあります。

Q3 横浜市戸塚区スーパー銭湯「葛の湯」。400円で25種類の風呂、最高です！

Q4 大学入学から13年です。少し寂しかったことはありますが、新生活にワクワクしてました。

Q5 後で後悔しないようにしっかり勉強してください。ただし、自分がやりたい勉強をしてください。しかし、ガリ勉はいけません。しっかり勉強して、しっかり遊んでください。

Q6 ブックオフにはまってます。ブックオフの250円コーナーで隠れた名盤CDを発掘すること。ジャンルはヘビーメタル。

高野賢哉（1987年卒）さん

Q1 私と妻の二人。9月にBABYが生まれる予定です。

Q2 会社員です。ゼネコン（総合建設業）に勤めてます。関東を中心に土木工事現場を飛び回ってます。工事が終われば次の現場……という感じで、約1年周期で転勤があります。引越し貧乏です。

Q3 埼玉県さいたま市（旧大宮市）です。引越したばかりなのでお薦めスポットは散策中です。

Q4 12年になります。〝思えば遠くへ来たもんだ～〟って感じでした。1週間位はホームシックにかかってましたねぇ。

Q5 社会人になると何をするにも〝責任〟がかかってきます。今のうちにタップリ遊んでおくことです。それもまた社会に飛び出すための社会勉強です。〝勉強漬け〟ってタイプの人は、今の民間会社は望んでいない！ アルバイト・旅行・恋……いろいろ経験してみてください。（悪い事しちゃ駄目よ）もちろん勉強も頑張ってね！

荒巻能史（昭和62年卒）さん

Q1 妻、息子（4歳）、娘（2歳）。4月に3人目誕生予定。

Q2 ・海で起こっている、あるいは過去に起こった現象を化学的手法によって解明し、地球環境変動の将来予測を行う研究。

・自然科学研究一般に言えることですが、結果が直接、一般の方の目に触れる機会が少ないので、自分の仕事の重要性を説明することが難しい。結婚する際、妻の両親に自分の仕事を説明するのに大変困ったことが思い出されます。

・研究論文を海外の研究雑誌に発表し、海外の研究者からその別刷り（自分の論文が掲載されているページの抜取り）を請求されたとき、自分の研究が世界に認められ、有効に利用されていると実感できて小さな感動を覚えます。

Q3 茨城県つくば市。今年になって引っ越してきたばかりなので、まだ何も分かりません。

Q4 16年（東京1年、北海道8年、青森7年）になります。大学受験に失敗し、このまま地元で浪人生活を送ってもダメだと考え、上京して自活しながら東京の予備校に通いました。そのとき、現在の恩師が著した研究論文に出会い、北海道の大学に進学することになるのですが、柳川を離れたときには、まさか北海道で生活するなんて考えてもみませんでした。人生の約半分近く九州を離れて生活していると、「九州」、「福岡」という単語を目にするだけで感傷的な気分になります。

Q5 伝習館時代の私はいわゆる劣等生でしたから、アドバイスできるような立場にはありませんが、何事にも手抜きせず一生懸命取り組む姿勢を身につけることは大変重要だと思います。それから……伝習館とか、柳川とか、福岡とか、狭いフィールドでものを見ないで、常に世界の中の自分を意識して行動しましょう。

吉原　浩（昭和58年卒）さん

Q1　妻との2人暮らし。

Q2　電機メーカーのシステム・エンジニア（私立大学担当）

苦労した点…なかなか仕事をこなせなかったこと。（今もそうですが……）

充実感を感じるところ…一つのシステムを構築出来た時。

Q3　横浜市港北区　横浜国際競技場、横浜ラーメン博物館など。

Q4　18年。大学進学で岡山に行ったのですが、誰も知らない人の中でうまく暮らして行けるか、ちょっと不安でした。

Q5　厳しい不況で将来の展望も今はけっして明るくないかもしれませんが、望みは大きくもって、焦らず前向きに一歩一歩確実に歩んで行って欲しいです。

Q6　手軽で子供から老人まで一緒に楽しめるボウリングは、私にとっては今や趣味の世界を越えたライフスポーツです。皆さんもぜひ健康のため、人の輪を広げるため、ボウリングしましょう。

坂本智臣（高校23回卒）さん

Q1　家族構成　妻、長男（今春大卒、豪州留学1年）、次男（高2）。

Q2　横浜税関です。社会に影響を及ぼす麻薬、覚せい剤、拳銃等が国内に入らないよう日夜頑張ってます。

Q3　横浜です。中区に21年住んでいます。近くには日本発祥の○○が数多くあります。

最近、話題の赤レンガ倉庫。24年前は税関の持ち物で、当時、赤レンガ倉庫の中で仕事していました。

Q4　故郷を離れて31年になります。大牟田駅から夜行列車に乗り東京まで出てきました。当時付き合っていた女の子の自宅に寄って、大牟田までいきました。高校の友人が沢山見送りにきてくれました。列車が駅を出ると、涙がこぼれ落ち、ついには寝台で泣きじゃくりました。あの時はどういう気持ちだったのか自分でもわかりません。

Q5　勉強も大事ですが、勉強だけでは得られないものを得ることができるのは高校時代です。多くの友人を作り、大いに遊び大いに学んでください。小生は大いに遊び、大いに遊ぶ高校生だったので、あまり「学ぶ」とは言えないのですが……。

志牟田　美佐（1986年卒）さん

Q1　夫が一人います。

Q2　脳における記憶のメカニズムを研究しています。

Q3　いつも鼠の世話をしなくてはいけないことと、何才になっても大嫌いな勉強をしなければいけないこと。新しい発見をした時に充実感を感じます。

Q4　文京区です。東大の近くに住んでいます。東大の敷地内にはいろんな不思議なところがあるので、ちょっとした散歩にお勧めです。

Q5　15年です。ちっとも成長していないなあと思います（気持ちは18の時のまま）。

Q6　友達を沢山作ってください。学生時代の友達は後に宝となります。

Q7　ようかん

堤　弘崇（1984年卒）さん

Q1　両親同居の三人

Q2　地域振興コンサルタント会社のアルバイトを経て、定食屋に勤務。その後、Uターンしてから河川の流域連携NPOの専従スタッフに内定し、色々と準備に追われています。流域連携というのは川の問題は川というラインだけを見るのではなく「森は海の恋人、川と田んぼは二人のデートコース」というように水系や流域の産業なども含めてゾーンで問題を解決していこうという発想です。苦労と言えば、全部苦労ですが（笑）、「法にかない、理にかない、情にかない」と考えなければいけないことでしょうか。

Q3　矢部川と塩塚川の間で有明海の風の届くようなところです。

自然のランドマークで位置をつかむ発想をバイオリージョン（生命地域）といいますが、単に行政の区分で言うと福岡県大和町となります。

Q4　予備校を出た後に、大学・フリーター・就職と7年間東京に住んでいました。多摩地域だったので緑は多かったのですが、堀なぞあるわけもなく「東京は乾いたとこやねぇ」と思っていました。

Q5　知行合一、つまり「知ってること」と行動を一致させること」は難しいけど目指してみて下さい。（私も出来ているわけではありませんけど）勉強も大事ですが、たまにはフラフラ出歩くのも勉強のうちですよ。

Q6　ファシリテーションの技術。「引き出し、支援し、促進する」という意味の言葉で会議やワークショップなどの場づくりの方法論です。

NPOだけでなく企業の会議、政治の議会、教育の現場にまで色々と応用出来るものだと思います。興味のある方は岩波アクティブ新書「ファシリテーター革命」中野民夫　740円を参照してみて下さい。

渡邊聖子（昭和57年卒）さん

Q1　夫と猫1匹。

Q2　博物館の展示を設計・製作したり、運営計画、施設計画など、ミュージアムにかかわるいろんなことを仕事にする会社です。

私の担当は全国にある博物館のコンサルタントをしています。日本全国に3、000もの大小の博物館がありますが、どれひとつとして同じものはないわけで、全ての博物館がその地域の歴史や文化を語っていて、興味はつきません。

ただ昨今は厳しい経済状況の中で、文化にかかわる事業はのきなみ予算カットされる傾向にあります。こんな時代だからこそ、〝文化〟〝芸術〟を大事に育てていくべきだと思います。

Q3　渋谷区代々木上原です。近所には郷土の偉人、古賀政男音楽博物館があります。私達の親世代の古臭い音楽だと思いがちですが、まるでそんなことはありません。せつないほどの郷愁を誘います。

Q4　生ビールを飲むこと。

柳川を離れて47年。5月24日実母、逝去する。

みなさんの立派なお仕事ぶりは読んでいるだけで誇りと勇気を貰える気がします。

倉田嘉明（昭和35年卒）さん

Q1　3名、本人、妻（主婦）、長女。

Q2　会社員。

Q3　〒838-0106福岡県小郡市三沢4225-411。太刀洗にキリンビールの工場あり、そこで

伝習館東京同窓会 HP アドレス

http://www.asahi-net.or.jp/~dv4h-fior/densyuukan.html

yahoo などの検索エンジンで「伝習館東京同窓会」と入れて検索して下さい。

アンケートにお答え頂ける方は

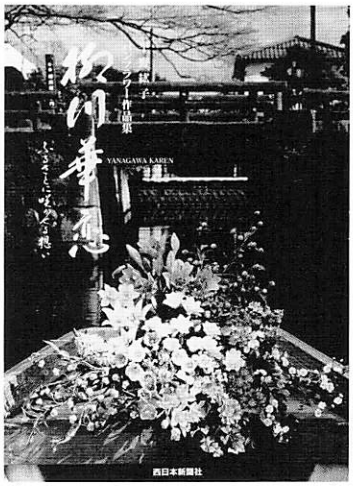
電子メール

café.yama@ak.wakwak.com　山口

又は

FAX　045-312-1544　山口までお送りください。

新刊紹介



「柳川華恋」

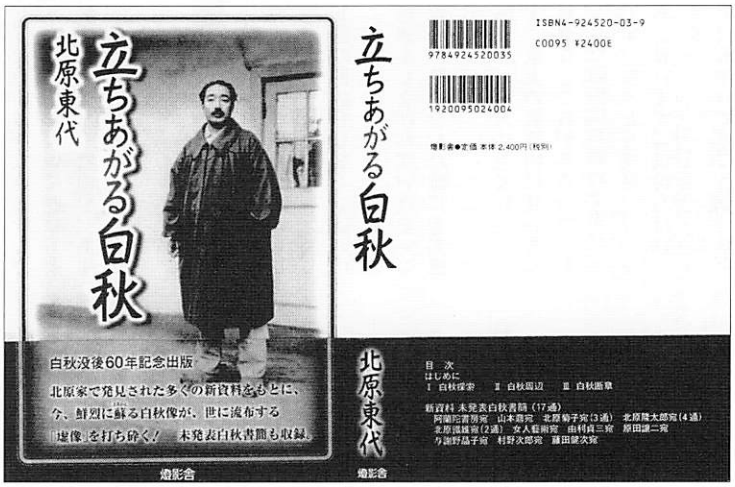
平野紘子さん（旧宝珠山、伝習館高校10回卒）がパンフラワー作品と柳川四季の風物写真とのコラボレーション作品集を西日本新聞社から五月二十日に出版。

映画作家大林宣彦監督をはじめ柳川にゆかりのある方々や伝習館同窓生の方々の素晴らしいエッセイ等約30編が作品集を彩どっています。購入ご希望の方は直接平野さんまでお申し込み下さい。定価３４００円のところ送料込み３０００円でお届け致します。

申込先

〒８３２－００７５
柳川市柳町１６－１
平野紘子
ＦＡＸ　０９４４－７４－５４７９

東京地区販売店(取扱店)(定価３４００円)
八重洲ブックセンター
紀伊国屋新宿本店



「立ちあがる白秋」

著者、北原東代（きたはら　はるよ）は白秋の子息北原隆太郎夫人。熊本県立玉名高校→京都大学文学部仏文科→同大学院博士課程修了。既著に『父母たちへの旅』（大東出版社）、『白秋片影』（春秋社）、『白秋の水脈』（春秋社）がある。一九四三年生。

「冬の桜」

著者はジュウタンこと故井上勇先生の次女で、伝習館高校7回卒。敬愛されている父上、井上先生の歌など、数首を紹介してみます。

又夫君洋二郎氏も高2回卒です。

下段の歌は編集者の独断で選びました。ご容赦下さい。

確かなる自(みづか)らのもの抱きもつ
冬の桜の樹幹美し

鶯のこゑに口笛合はせ吹き
朝を楽しげ職退きし夫

老眼鏡二つをかけてひたすらに
辞典出さんと父励みゐき

辞典出す希ひがすべて灰となりし
東京空襲を父は語りき

退職後教へ子の援助にて上梓せり
父の夢なりし「漢字解読字典」

戦前と戦後を生きて著書二冊
父の人生の未完を思ふ

朝明けを神社詣での村人に
発見されしと屍体の父は

国境(くにざかひ)の塚見んと行き老の身に
足をとられて墜ちしか父は

小学校隣りてあれば奥つ城に
父よ聴きませ子らの歓声

情報紹介
―白秋と城ヶ島―

ご提供
高１回卒　高木陽二

次の様な情報を戴きました。紹介します
――編集局

先般「東京同窓会報」創刊号をご送付いただき有り難うございました。役員皆様方のご尽力で出来上がった大変立派な会報をじっくり読ませていただきました。

江崎正直会長をはじめ旧知の方々のお名前を数多く拝見し懐かしい思いに駆られました。又、ド迫力のある柳川弁を目にし、口ずさんでいるうちに、柳川を離れて五十年になる小生は思わず涙ぐんでしまいました。そのほか同窓会報ならではの思い出のこもった記事の数々を拝見させていただき、懐かしいやらうれしいやら本当に有り難うございました。

編集委員の方々のお役目大変なことと存じますが、感動を与えてくれる同窓会報の発行に今後もご尽力くださいますよう、同窓生の一員として心からお願い申し上げます。

ところで、今日は、神奈川県三浦市で毎年開催されている「白秋祭」についてお知らせいたしたくお手紙を差し上げました。

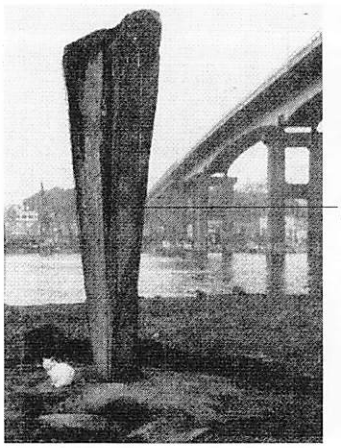
○「白秋祭」は毎年七月に三浦半島突端の城ヶ島で行われています。

○そこには「城ヶ島大橋」という橋があり、この橋を渡りきったところに、「白秋記念館」と「白秋碑」があり〝白秋祭〟は砂浜に設置された〝碑〟の前で行われます。

○主催は三浦市です。

○【祭】の内容は

・儀式＝挨拶（勿論白秋の功績をたたえる挨拶が中心です。）、
表彰式＝（応募された俳句や和歌の入選者にたいする表彰式です）
・白秋作詞の歌の演奏＝（地元のコーラス仲間や幼稚園児による合唱）
などです。



「城ヶ島の落雁」

○今年の「白秋祭」は七月十日（木）ですが、三浦市観光協会に問い合わせたところ、開始時間など詳細はまだ決まってないそうです。

柳川から遠く離れた三浦半島で私どもの大先輩・北原白秋を偲ぶ盛大な行事が行われていることに感慨を覚えます。

小生は、過去三回ほど参加したことがありますが、潮騒を聞きながら大先輩の歌を聴くのはなかなかよきものです。このような行事を主催して下さっている三浦市に心から感謝します。

関東にお住まいの同窓会の方たちにも機会があれば、城ヶ島観光かたがた白秋祭にご参加なさることをお勧めしたいと存じます。

なお、三浦市観光協会の話によると、七月十日の祭は正確には「北原白秋碑前祭」といい、白秋に関係のある祭りとしてはほかにも「俳句祭」などもあるとのことでした。なにしろ白秋先輩は「城ヶ島の雨」で城ヶ島の名を天下に轟かせた方ですから三浦市の白秋先輩に対する思い入れは並大抵のものではありません。

ご参考までに三浦市観光協会の電話番号を左記します。

☎０４６-８８８-０５８８

なにかの時は観光協会にご照会くださればと存じます。

以上、「白秋祭」について簡単ですが、ご案内を申し上げました。ご参考ください。

7月10日（木）
みさき白秋まつり碑前祭
（～12月下旬白秋展）（城ヶ島）
白秋記念館
北原白秋の文学記念館
☎０４６-８８１-６４１４
（月曜定休日）
お問い合わせ
三浦市商工観光課
☎０４６-８８２-１１１１
三浦市観光協会
☎０４６-８８８-０５８８

先輩・後輩より

実の兄と思っていた檀一雄

（檀一雄と私）

中53回卒　古賀和典

檀一雄について書き綴ることは、さして難しいことではない。すべてが昨日のことのように思い出すことができる。ただあまりにも多過ぎてどれから書いていいのか迷うのである。

私は小学校三年生の夏の夕までは本当の兄弟だと思っていた……。なぜ三年生の夏の夕方とまで覚えているかというと、あまりにもショッキングなかたちでその真実を知らされたのでとてもその日のことを忘れることが出来ないのである。

檀一雄の兄弟はもう周知のことと思うが妹三人の四人兄弟（編注、父母を同じくする兄弟）。四人とも九州は柳川の我が家で一緒に暮らしていて、にいちゃん、ねえちゃんと呼んでいた。三保ねえちゃん、寿美ねえちゃん、といったぐあいである。したがって兄弟でないと思うほうが不自然で、何の疑いもなかった。

当時檀一雄は東大在学中で、夏休み、冬休みには必ず帰って来ては一家大団欒になるのである。その日も夏休みで帰って来ていた檀が、午前中から川へ泳ぎに連れて行ってくれたり汲水（くみず）場の屋根にのぼって絡まった葡萄の実を食べたりして、いつもながら楽しいひとときであった。

夕方になって、急ににいちゃん、ねえちゃんの様子が慌ただしく

「どうしたの？」ってたずねると「福岡へ行って二三日帰って来ない」という。

「俺も行く」

「今日はダメ」

檀がいつになく厳しい口調であった。そうなるとこちらも意地にでもついて行きたくなるのだ人の常。だって今まで何処行くんでも一緒に連れてってくれたじゃないか、という思いで散々、ダダをこねたようである。何故かこの辺のところはあまり覚えてなくて、ただついにはオヤジにまで食ってかかったのを見るに見兼ねた檀が、私の襟首をひっつかんで近くの銭湯までひきずってゆき大きな風呂にそのままドブン！

もちろん二人とも服を着たままである。この瞬間だけは鮮烈に覚えている。まだ沸いていない冷たいお風呂に沈められ怖かったこと、思わずブルブルッと身震いした。水の冷たさばかりでなくあの異様さにおののいたのである。

いきなり銭湯といってもお分かりにならないと思う。このへん少し説明させていただくと、私の爺さん（編注、古賀生三）の代から銭湯をやっていて住まいのそばにあった。つまり、我が家は父が地方銀行の、そのまた地方のちいさな支店の支店長で、その傍ら銭湯をやっていた。だから営業していようがいまいが、出入り自由だった。でもいまだに不思議なのは、その日が夕方にかかわらず何故お客がいなかったのか？　ちょうど休日だったんだろうか。たった二人っきり…。

田舎の銭湯の巨大な空間に南国の真っ赤な西日が幾条もの斜線を作る中、檀のエコーのかかった声がまるで天国からの声のように、まさに威厳をもって響きわたった。今まで我々のガキ大将だったのが、急にどこかの教祖様のような様変わり。

「俺たちはこれから本当のお母さんに会いにいくんだ」

「……」

「そのうちお前達にも紹介する。俺の兄弟もな。でも今日はだめだ」

「俺たちのほかにまだ兄弟がおるト？」

「お前は兄弟じゃあなか！」

「……」

その時の異様な雰囲気に圧倒されたせいか何も言えなかった。それより無言のまま睨み合っているうちに何故か涙があふれて仕方がなかった。私は水の中に潜った。このまま出てやるもんかと思った。そのうち、にいちゃんも潜ってきた。水中でしばらく見合った。長い刻がたったように思えた。檀の鼻から気泡が真珠のように淡く光って立ちのぼった。

高岩家の人々

最初、檀一雄に連れられて行った福岡の街は、柳川の片田舎育ちの我々にとっては憧れと驚嘆の街だった。町中を電車が走っている。人がいっぱいいる。何もかもが驚きであった。その高台に高岩家はあった。もちろん、そこが檀一雄の異父兄弟の家とは知る由もなかった。檀を語るときにこの家の人々のことを話さないわけにはいかないだろう。

高岩家から見下ろす浄水池は壮大な景観だった。春は満開の桜が、雲か霞のように見渡せ、夏は市内だというのに緑のオンパレードだった。

高岩家にはアレックスという利口そうな犬がいた。我々はなんと本でしかお目にかかれなかったシェパードだった。あんな洒落た名前、一体だれがつけたんだろう。

その頃我が田舎では自慢じゃないが、太郎はいたが（何処からいつの間にか迷い込んで来た雑種の犬）、こんな洒落た名前をつけるような犬はいなかった。せいぜいカタカナの名前でもポチぐらいだった。

いや驚いたのはそればかりではない、高岩家では食事の前には必ず手を合わせてお折りをするのである。我々が無作法にもキョトンとしているのを見ても、高岩家のキモッタマ母さんは別に咎めるでもなく、いつもニコニコと笑っていた。私はそういうママが大好きだった。それは甘いのではなく寛容なのである。そのかわり何か悪いことでもしようものなら誰彼の分け隔てなく厳しく叱られた。このキモッタマ母さんこそ檀の実の母（編注、生母高岩とみ）だった。

玄、震、淡、仁、忍、耐これはナーンだといいたい。これではまるで漢書の掛け軸にでもでてきそうな字ばかりである。高岩家の六人兄弟の名前である。玄ちゃんはやさしく、震ちゃんは私と同級生で年も同じだったせいかよく気が合った。淡ちゃんは今や東映株式会社の社長である。そういえば小さいころからすでに大人の風格があった。いや今日あることを知っていたらもっと可愛がるなり、へりつくろうなりしておけばよかったと後悔しきりの今日このごろである。

仁ちゃんは十歳ぐらい離れていたが、いつも我々の中に入ってはニコニコと和を崩さない賢さをもっていた。そんなとき檀はいつも忘れられた存在であった。時としてチェアマンの役を引き受けることがあっても、積極的に参加することはなかった。

忍ちゃん、耐ちゃん姉妹二人とも現在、塾の先生や大学教授、もちろん幼少のころから美人で頭がいい。このことに関しては、我が家で一悶着あった。父が母に向かって軽いからかいのつもりで発した一言が、そもそもの発端であった。

「高岩家はハタケがいいから、あんなに優秀なのがでくっとじゃろね（できるんだろうね）」

「いいえタネです。いつも気前よくあっちこっちでふりまいていらっしゃるから、もう何も残っていないんですよ。」

母がいつになくムキになって言い返した。

高岩家のどこにそんないい畑があるんだろう？

「あの勝太郎の事だろう」

「勝太郎だかケツたろうだか知りませんがネ」

「あれは銀行の接待のお客様のためにようだチ言うたじゃなかか」

どうやら勝太郎というのは村のションベン芸者のことらしい。私はいつもこんな修羅場には立ち会わないことにしている。できは悪いが逃げ足は速い。どうせしまいには私のところに、しわよせがくるに違いないんだから……高岩家の人々のお蔭をこうむることはたまには凶とでることだってあるのだ。

檀と私の、兄弟でなく義兄弟（実は従兄弟であった）の出発はこの高岩家から始まる。

檀一雄は東大不経済学部卒

人間の記憶というものは実に曖昧なもので、檀については誰よりも知っていることがいっぱいあると思っていたが、いざ書くとなると、私などは、檀の人生のほんの一部分をカスメただけだということが分かった。これは私の大変な思い上がりで、つまり私の思いのなかだけのことであったのだ。とにもかくにも檀について書いていくしかない。

檀はいつも風のように帰って来て、風のように去って行った、といった表現がピッタリだと思う。我が家では、そのいない間はいつも東京の学校に行っているということで片付けられていたふしがある。私の小学校の高学年まで東京の大学に通っていたとすれば、実に七年も八年も東大に通っていたことになる。したがって前に書いた、当時檀は東大に云々というのは間違いだ。

私の母はいつも「一雄にいちゃんは東大の不経済学部に行きよるけんネ」と言っては、私達にその金使いの荒さをグチッていた。ということはタマにはお金を送っていたのかも知れない。

さて、その不経済学部出身の檀と私がコンビで商売にかかわったのだから世の中、不可解である。

悲運の会社　隆記洋行

かわいそうに、その潰れるべくして潰れた会社、隆記洋行の社長は白髪の素敵な紳士で、檀の母の関係のかただと伺っていた。その会社になんで予科練がえりの、商売の商も分からない私が紛れ込んでいたのか。檀に誘われるままに参加したのだろうか、今となっては分からない。終戦間もないころである。

場所は福岡の東中洲の近くで綱場商店街と確か言っていたと思うが、周りには商店らしきものはなく雑草が生えていた。しかし、建物は当時としては立派なものでモルタル二階建てで四〇坪もあったろうか。一階がオフィスで二階は半分

が美容室で、あと半分は住居になっていた。隆記洋行とはペイントを何処かから仕入れて販売する会社のようであった。とにかく私は何も分からず金魚のウンコみたいに、檀にくっついて行くだけである。

主に集金業務が多かったと思うが、あれは熊本へ出張したときのことだった。どうやら集金がおわり、さあ帰ろうかというときであった。熊本の連隊の放出品で、鉄兜が大量に手に入るという情報を得て、我々はそのブローカーをたずねた。当時、鉄製品がなく鍋釜が極端に不足していた。檀はこれで鍋釜を作れば絶対大当たり間違いなしと大はしゃぎであった。

「ひとまず柳川に運んでもらおう」ということになって、私達はその業者のトラックの荷台に、うずたかく積まれた鉄兜と一緒に意気揚々と乗り込んだ。

トラックと言っても、当時のトラックは軍隊払い下げのガタピシトラックで、三月といえども風は冷たくおまけに揺れるわで、私はなんで助手席に乗らなかったのかと後悔した。だが大声でロシア民謡なんかを、歌うというより喚きながら手を振って悦に入っている檀をみると、いまさら俺だけ助手席に行ってもいいかとは言い兼ねた。

柳川は私の郷里で、結構あちこち顔がきくので、ひとまず町の鉄工所で加工して、ここを拠点に売りさばこうという魂胆だったようだ。だが結果は意に反して惨憺たるものであった。我が家の質蔵だった二つの蔵のうち一つは鉄兜でいっぱいになった。その薄暗い蔵のなかで鉄兜をかぶって呆然としている檀の姿が今でも目に浮かぶ。

「熊本へ行ったきりしばらく帰って来ないので心配しよりましたァー」というヨソ子ねえさん（檀夫人）の優しい声が身にしみた。

劇団　珊瑚座の悲劇

悲運というものはかさなればかさなるもので、ワケわからぬ得体の知れない劇団が隆記洋行のオフィスを占拠していた。もちろん昼間は会社で使っていたが、夜ともなるといろんな人が集まって来た。こんなことを書くと当時の劇団の方々にお叱りをうけるかも知れないが、少なくとも私の目には一種不可思議な人種に思えた。

そのなかに、かの入江杏子もいた。

『火宅の人』によると上京してから事を起こしたように書いてあるが、私の見る限り、檀は既にこの時から大変なご執心で、その打ち込み様はいじらしい程であった。ヨソ子さんという綺麗な奥さんがありながらと、オカヤキ半分憤ったくらいだから……。当のヨソ子さんはどう思っていたか、いまだに確認する機会はない。

それより、このヨソ子夫人の献身ぶりにはさすがに無神経な私も頭が下がった。あの食糧事情が悪いときにメリケン粉やトウモロコシをまぜて長い棒状のパンを作ってくれたり、サラダやスイトンを作って食欲旺盛な私達の胃袋を満たしてくれた。昼は二階の美容院の面倒や事務所のお茶出し、それに掃除洗濯と全く大忙しだった。今と違って掃除機や洗濯機はないころだから大変だったと思う。

話は脇道にそれたが、檀はこの珊瑚座なるものに懸命であった。したがって、隆記洋行の仕事は疎かになるのは当たり前である。出張の汽車の車中でも、台本とやらを取り出して

「おい、ちょっと読んでみろ。」

ジョ冗談じゃあない俺は劇団員でもなければ、芝居などやったこともない。そんな俺にせりふの相手をさせてどうなるっていうの！　と言いたいけど腰巾着の分際ではそうもいかない。結局まわりの乗客の奇異な視線を意識しながら、檀と私のヘンな、せりふのヤリトリが始まるのである。

この劇団珊瑚座がいつ頃まで続いて、いつ頃つぶれたのか知らないが、チエホフの『桜の園』だの、シングの作品で、たまには好奇心で劇団の稽古などのぞき見するんだけど、これがまた、ヘタ！ヘタばかり。もっとも私はあまり芝居に関心なく、そんなに多くの芝居を見たわけではないので評価が当たっているかどうかは疑問である。ちなみに田舎の沖端座（編注、柳川にあった祖父古賀生三の出資した劇場）という芝居小屋兼映画館で、ドサまわりの「国定忠次」だの水谷八重子新派大悲劇などを見た程度である。

私は何故かこの劇団には馴染めなかった。入江杏子のことが引っ掛かっていたのかも知れない。或いは当時の文化人ばかりの集団に、田舎者の私は近寄り難かったということもあったのだろう。この劇団が何回公演をしたのか記憶にないが、赤毛モノなんかやるよりおのれの劇団の悲劇でも演じた方が、うけたんじゃあなかろうか。

いずれにしても隆記洋行が潰れたとすれば、第一戦犯は無論私と檀だが、第二はこの劇団珊瑚座であろう。

檀国内貿易公司

檀が佐世保に出張だといえば佐世保にある米軍のP・X、つまりアメリカの兵隊さんの売店へ行くことなのである。私の記憶に間違いがなければ、ポスト・エクスチェンジの略だということだった。私は英語は敵国語だというので学校では教えてもらえなかった。だが檀は結構しゃべれるので、P・Xからでてくる兵隊たちを待ち構えて、たばこやチョコレート、ライターの石、オイル、石鹸、たまにはペニシリンまで買い付けるのである。何度か行くうちにはお馴染みもできてきて、先方で待っててくれるようになった。取引の場所も喫茶店などになり、オハイオからきたと言うマイケル・ヨダとかロス出身のニール・ケラーと仲良くなったりしているうち、私もブロークンながらなんとか日常会話ぐらいには事欠かなくなった。必要とは恐ろしいものである。おまけに仕入れた品物は右から左、飛ぶように売れる。

なのになぜ隆記洋行内・檀国内貿易公司はダメになったか？　たばこである。チェスターフィールド、ラッキーストライク、キャメル、フィリップモーリスなど色も鮮やかなパッケージで美味しいこと、このうえない。それもその筈、当時我々は辞書の紙を巻いた配給のたばこでただ煙が出る程度で、このアメリカたばこの香りのよさ、味のよさ！　ただしこれは最近懐かしさも手伝って買ったチェスターにしろ、ラッキーにしろ昔ほど美味しくない、マイルドセブンのほうがずーっと美味しい。これはどうしたことだろう。

檀は手当りしだい四、五十本は吸ったと思う、そして言訳がましく「美くしゅうて、コゲンうまかたばこバ作りよるアメちゃんに勝つワケナカネー」と妙な感心のしかたをしていた。それに檀は気に入ると誰彼となく、ポンとたばこを進呈するのである。それもワンカートン惜しげもなくである。仕入れに限りあるたばこは、こうして売る前におおかたはなくなってしまう。またチョコレートやガムなどは、子供が好きだった檀は子供たちにバラ撒いた。それはあたかも義賊が庶民にバラ撒く金銭のような心地だったにちがいない。

こんな具合だからたとえ他の品物が多少法外な値段で売れたにしても、トントンか赤字になるのは不経済学部出身の、檀小僧次郎吉サマでなくともよく分かる。それにこれは完全な密輸入なのである。とにかく檀と私がなにか商売らしきをやると、ヨソ子さんの着物が一枚ずつ質屋に入るというんだから困ったもんだ。

ヨソ子さんは覚えていらっしゃるだろうか。

「和典ちゃん一寸お使いに行って」と言って風呂敷包みを渡される。中洲の方へ十分ほど歩いた所にあった横田質店へ行くのである。包みの中には、ヨソ子さんの着物がホンノリと芳香を漂わせ入っている。檀は罪深い男だ。あんな綺麗な奥さんの着物を質入れさせるなんて……。

実際のあの頃のヨソ子さんの美しさといったら、いま娘のふみがキレイのなんのと言われるが、その比じゃあなかった。のちに檀に聖女と言わしめるほど、美しさのうえに気品があった。一見近寄り難かったが、実際話たりすると気さくで、なにより優しかった。

ともかくこんなぐあいで隆記洋行はつぶれてしまった。

㈱平和綜合印刷社　代表取締役）

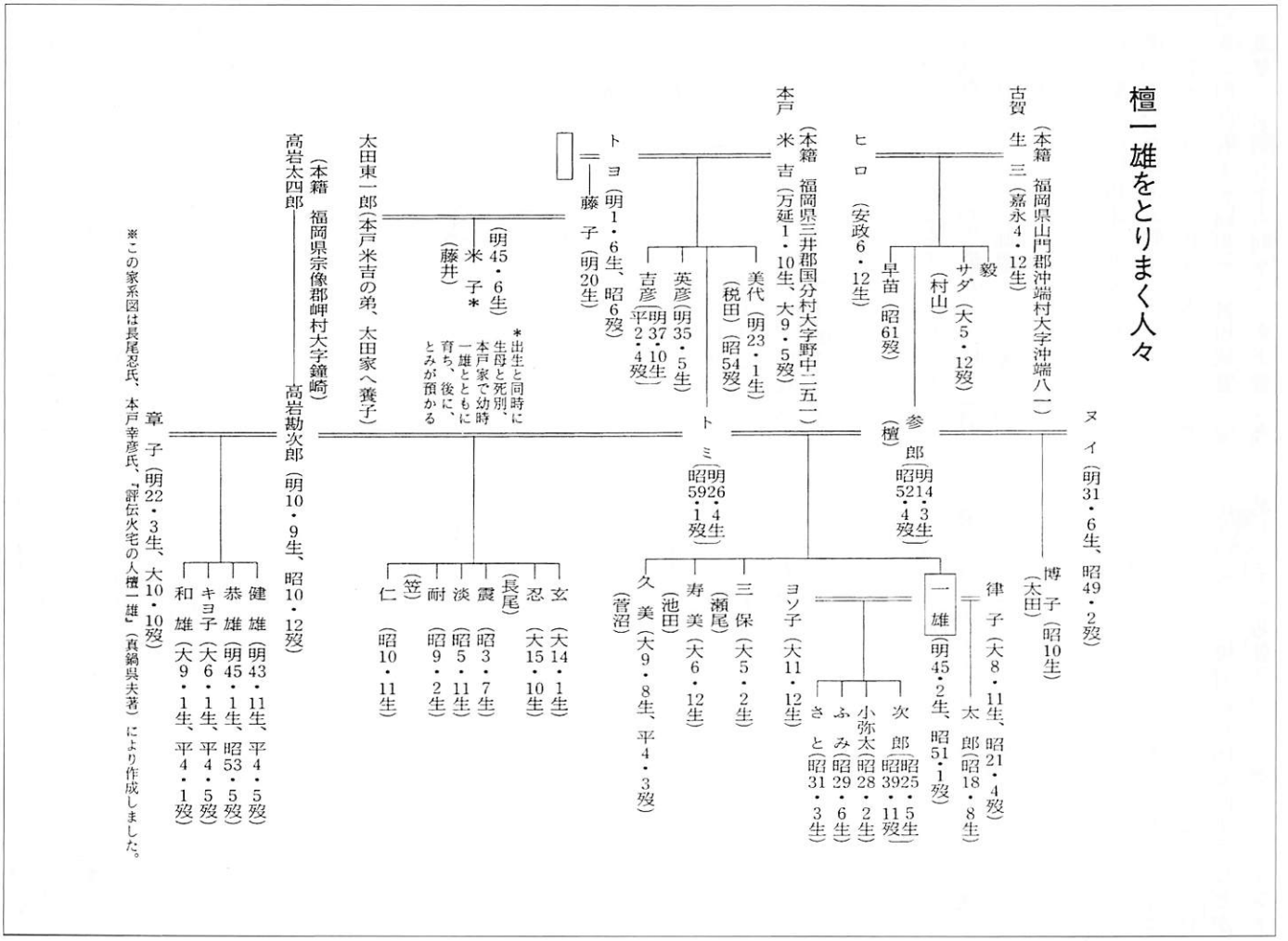
「檀一雄――文学の故郷

平成六年三月刊

野田宇太郎文学資料館発行」

より転載

檀一雄をとりまく人々



※この家系図は長尾忍氏、本戸幸彦氏、『評伝火宅の人檀一雄』（真鍋呉夫著）により作成しました。

廣松渉と宮川武寿・龍昇吉

―その人間関係の土壌―

中56回卒　成清良孝

二〇〇三年二月六日（土）の朝日新聞夕刊に、「世界最高水準のド・イデ研究」という見出しで、神奈川大学教授的場昭弘氏が、昨年秋に岩波文庫で刊行された廣松の『新編輯版ドイツ・イデオロギー』を紹介している。

それは一九七四年（昭和四九）、当時一般に読まれていたアドラッキー版『ドイツ・イデオロギー』に代わって、綿密な考証と独自の視点で編集・出版して一躍注目された『廣松版ドイツ・イデオロギー』（河出書房）の文庫版である。

河出書房版が出た頃、龍昇吉（中学伝習館五十六回生。当時、日本開発銀行調査部に勤務）は、「廣松君が途轍もない大きな学問的業績をあげている。彼のフォイエルバッハ論（『ド・イデ』所収）は、世界の第一線の学者でも、この著作を抜きにしては、論考を前に進めることはできない。カナダに出張した時、オタワの図書館に廣松の論文が載った冊子が備えられていた」と、かなり興奮して話していたことを記憶している。

『ドイツ・イデオロギー』は、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスによって一八四五年～一八四六年に共同執筆されたもので、唯物史観誕生の書として知られている。しかし、きわめて難解というのが通り相場だった。それは底本とされるドイツ語原典が手稿の個々の部分を細かく切り刻み、恣意的な解釈で組み直したため、本来の文脈は分断されたまま、というのが原因と言われている。テキストとしては致命的な欠陥である。

これを廣松は従来の諸本を徹底的に批判し、厳密なテキスト・クリティークによって、完璧に近いものに仕上げた。ドイツ語圏の学者でも成し得なかった偉業というべきであろう。

廣松は「週刊読書人」（一九七〇年八月一七日号）に「読書遍歴」と題してエッセーを寄稿している。これは後に岩波書店〈同時代ライブラリー〉『廣松渉哲学小品集』に収められている。その一部を引用する。

> 私は終戦の翌年に中学に入学した世代――つまり、旧制中学最後の入学者で途中から新制に切り換えられた世代――に属する。私の通った福岡県柳川の伝習館という学校は、そのころ、都会からの疎開者や海外からの引揚者の子弟が蝟集（いしゅう）しており、田舎中学のわりには多少とも〝文化的〟ふん囲気をもっていたのではないかと思う。
>
> 私が秋ごろから出入りしはじめた左翼サークルには、三級うえのMとかRとか、錚々たる読書家たちがおり、同期のSなどの加入もあり、私としてはこれらの先輩や同輩たちの話題についていくためにも、せい一ぱい背伸びをして、手当り次第に本を読まざるをえなかった。小説などというものを読むひまがなかったのは勿論のこと、授業なんかにうかうか出ているひまもなかった。

中学生の廣松に、人格的にも思想的にも強い影響を与えたのはMこと宮川武寿と、Rこと龍昇吉である。

あの年代の若者には、ことなかれ主義の教員は侮蔑（ぶべつ）の対象でしかなく、畏敬する二、三年先輩の言辞には、否応（いなおう）なく心酔していく傾向にある。加えて宮川や龍には、並はずれたカリスマ性もあったように思われる。

その宮川武寿が生前、「中学生の頃の廣松は、数学や物理は飛び抜けてできたという印象が強いが、しかし、廣松版ドイツ・イデオロギーは、天才的な語学力がなければ絶対不可能な業績だよ」と言っていた。

廣松渉は東大教授を停年で辞めた年の一九九四年（平成六）五月二十二日（日）午前九時四十八分、肺癌のため虎の門病院で死去した。

五月二十五日（水）午前十一時半から港区高輪の高野山東京別院を借りて、無宗教の告別式があった。

伝習館の同窓生で出席したのは、江崎和夫（旧制五十五回生）、宮川武寿、成清良孝（旧制五十六回生）、木下健（高校一回生）、廣松と高校の同期生中村好子、菅家由紀子、松崎美年子、木村澄子。その頃、すでに立命館大学教授に転出していた龍昇吉の出席はむりだった。

そのあと、木下、宮川、女性四人の計七人で、近くの高輪プリンス・ホテルで、ビールを飲み、遅い昼食をとった。

廣松渉の少年期に大きな影響を与えた宮川武寿は、奇しくも高輪の生まれ。区立高輪台小学校を経て、慶応普通科へ進学。一九四四年（昭和一九）二年生の秋、戦局ますます逼迫、大都市の市民生活が危胎（きたい）に瀕（ひん）したため、医者をしていた父親は一家をひきつれて、城内の実家に疎開した。

都会育ちの慶応ボーイの宮川が、柳川の生活にいかに違和感をおぼえたか、言語環境一つとっても、容易に想像できる。

後年、宮川がよく口にしたエピソードがある。

生物の大津山定近先生から、

「がねンねまっとっとばくうと、はらンせくとぞ」

と言われて、外国語を耳にしているようなちんぷんかんぷんな印象を受けた。家に帰って祖母に翻訳してもらったら、「蟹の腐ったのを食べると、お腹が痛くなるんだよ」と言われて、これはたいへんなところへ来た、と強いショックを受けたという。

わたしなどは柳川に生まれ、二十二歳になるまで生息していた生っ粋のゼーゴー（「在郷」のなまりか）のせいか、作山ミツさん（柳河高女四七回生）などが話してみせる独特のアクセント、イント

ネーション、プロミネンスをふまえたスロー・テンポの柳川弁を聞いていると、遠く過ぎてしまった少年時代の感触が切なくよみがえってくる。

廣松渉が亡くなって二年半たった一九九六年（平成八）十一月二十九日のことである。同期の熊川英一郎から、「宮川武寿君が、十一月二十三日に亡くなった、と彼の会社の人から聞いた」と電話があった。熊川は税務関係の仕事で宮川の会社と関係があった。

わたしはすぐ京都の龍昇吉に電話したが、いちばんの親友のはずの彼も知らなかった。まさか宮川の自宅に確かめるわけにもいかず、実弟で九大教授の宮川謙三君（高校三回生、廣松と同期）の電話番号を調べて、龍からかけてもらったところ、事実だとわかった。家族だけの密葬だった。

翌年の三月二十九日の夕方、三田の慶応キャンパスの中にあるファカルティ・クラブで、「宮川武寿君を偲ぶ会」が開かれた。発起人代表は、宮川の慶応大学の同期で、慶応大学名誉教授の北原勇氏。北原氏はマルクス経済学のオーソリティである。北原氏のルーツは柳川で、父上は伝習館の古い卒業生。北原白秋の従兄弟にあたる。

北原氏は、「宮川武寿君は本人も大学院進学希望だったが、家の経済的事情が許さなかった。大学に残っていれば有数の経済学者になっていたでしょう」と、彼のありあまる学才を惜しんだ。宮川の父は戦後間もなく病死している。

当日の伝習館関係の出席者は、龍昇吉、江口芳夫、熊川英一郎、成清良孝（以上、同期）久米よし子、松崎美年子（この二人は廣松と同期）。柳川からは宮川謙三夫妻。それに廣松渉夫人の邦子さん。

一九九七年（平成九）の晩秋、わたしは北海道へ行き、函館、札幌などを巡ったが、小樽へも立ち寄った。小樽はわたしには伊藤整や小林多喜二のふるさととしての認識がある。

ＪＲ小樽駅前に、小林多喜二を顕彰する大きな看板が立っているのを見て、深い感銘を受けた。思想信条の自由が保障されている現代の日本では、体制とか反体制とかのカテゴリーを持ち出すこと自体がナンセンスである。『ドイツ・イデオロギー』の研究で世界最高水準の業績をあげたばかりではなく、彼独自の壮大な哲学を構築した（『存在と意味』）廣松渉を顕彰するモニュメントが、西鉄柳川駅前か（それとも「蒲池駅前」か）に建たないだろうか。これは柳川の精神風土に思いをはせた、わたしのないものねだりの吐息にも似たつぶやきである。

昭和六十年頃（推定）「ふくおか会館」の五期会で。
（前列右から）
龍昇吉、廣松渉、成清良孝
（後列右から）
木下健、宮川武寿、逸見萬丈、井関義久
注：逸見は廣松と同期。当時、太陽神戸銀行勤務。井関義久は旧中五六回生、当時、横浜国立大教授。

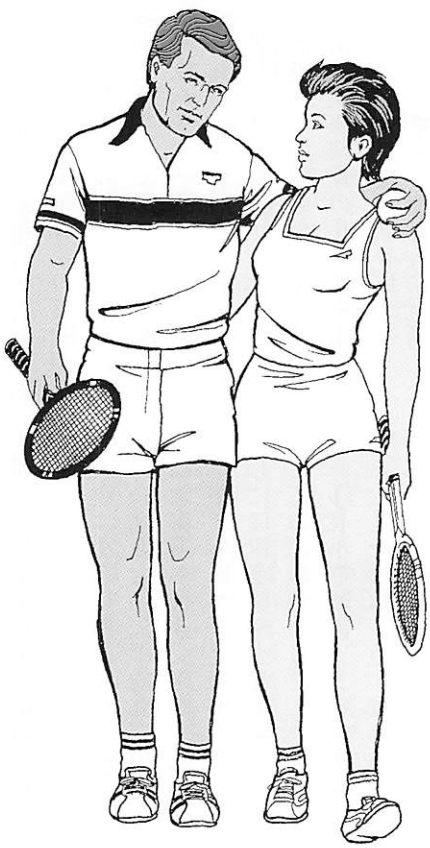
廣松渉　紹介

・一九三三年～一九八四年　柳川市出身
・一九四六年（昭和二十一年）
福岡県立中学伝習館入学。学制改革により伝習館高等学校へスライド。
・一九五〇年（昭和二十五年）
高校二年生の時朝鮮戦争勃発。アメリカの侵略戦争反対のビラを撒いて停学。反省の色なしとして退学処分を受ける。
・草創期の大学受験資格認定試験（大検テスト）に合格。
・一九五四年（昭和二十九年）
東京大学入学。
・一九六五年（昭和四十年）
東京大学大学院博士課程（哲学）終了。
・一九八二年（昭和五十七年）
東京大学教授。
◇
著作多数。
岩波書店版『廣松渉著作集』全十六巻。これに集録されている以外にその数十倍の論文・対談・講演・エッセイを残す。
代表的著作は『存在と意味』。全二巻で、三巻目を執筆中に他界。そこにはヨーロッパ的近代哲学の行き詰まりを打破すべく新しい世界観の体系的構築が模索されている。

こらホンなこつ聞いてはいよ！ヨカやっかんも

―激動期の伝習館テニス物語―（その１）

高伝１回卒　横山二三男



あらメタどんがやる遊びタイ

私が生まれ育った六騎の漁師町、沖の端の人たちは庭球という球技について異口同音にこう批評していた。

昭和の初期、まだ欧米スポーツは日本人の肌や心に深くしみ込んでいなかった。

たしかにそれは

Sissy sport

のように見える。華やかなウェアを身にまとい、バレーダンサーのような軽いフットワークで白球を追いかける姿は男らしい勇敢なコンタクト・スポーツとはほど遠い感があったかもしれない。

美しさがかもしだす弱々しいイメージに映ったかもしれない。だが、ホントはそうじゃない。

いま、あなたがラケットをはじめて握り、思いっきりボールをひっぱたこうとしてみるとよく分かる。

冗談じゃない

テニスとはそんなヤワなスポーツじゃありません。むずかしい。

息つく暇もなくボールを打ち返さなければならない。敏速な動き、右に左に、前に後に走ることが要求される。

一瞬たりとも集中力に欠けたらボールはとんでもない方角へ散ってしまう。

精神と肉体を極限まで駆使しながら長時間にわたり戦う。まさにこれ格闘技の一種だと云っても過言ではない。

フランスの宮廷競技から発展改善された近代テニスの歴史は130年をゆうに越した。野球におとらず、サッカーに負けないほど世界中の人たちに愛され親しまれている。

ヨカやっかんも

柳川とテニス

そのエン結びはトンさんから始まる。

昭和８年（一九三三）、立花文子さんは林美喜子さんとのペアで、第10回全日本女子ダブルスを制覇、黄金の優勝カップを柳川で飾られたにちがいない。

文子さんといえば、町民ことごとくが〝お姫様〟とあがめたトンさんの奥方である。

平成三年五月にトンさんご一家と伝習館庭球部ＯＢが揃って撮った写真をよくご覧いただきたい。

前から二列目、着席している人たち、左から寛茂さん、文子さま、トンさん。あとはご想像にまかせる。

娘の快挙に感無量となった第15代藩主、鑑徳氏はこう云ったであろう。

「余はそなたの大義をうれしく思うぞ。祝儀としてコート一面をそなたへつかわす。御家中の者どもはもとより、広く内外のテニス愛好者たちをこゝに集め、なお一層の奮励努力をされよ！　よいか、文子姫、そなた良きに計え！」

へへーッ、ありがたき幸せに存じ奉る。

臣下のため、そして栄えある優勝を記念して御花の広大な敷地の東端に一面のクレーコートが新設されたのである。

うっそうとした樹林に囲まれたテニスコートはどの方角から眺めても天下一品、これにすぐるコートは国内で見当らない。

現代の柳川テニスの草分け、つまり開拓者はトンさんその人であると、おのおの方よ、どうかご認識のほどお願いたてまつる。

当時の御花の西洋館に向って右側の正門脇には常時、衛士（現在では守衛またはガードマン）が駐留しており一般人の出入りを厳重にチェックしていた。

24Ｈ勤務態勢はコンビニなみだった。

まして、この大邸宅を出て一歩庶民の町並みに入ると、〝巷はまっ暗〟、つまり

軍国色に彩られ、外来スポーツすべてを敵性視するという情ない風潮がたゞよっていた。

あゝそれなのに…

ひょっとしたご縁(この話は次のコーナーでじっくり紹介します)で、小学生の私はこの門を自由に出入りできる権限を拝受していたのである。

信じられない幸運をつかんでいた。

このフリーパスが伝授されたおかげで私の人生はテニスひと筋、一直線にまっしぐらの道をたどることになる。

私自身はラッキーでも私の身の回りを世話する人たちにとっては、この単細胞的な生き方についてアンハピーだときめつけるかもしれない。

晴れた日の日中に天高く爽快な金属音が四方に響きわたる。

ポ〜ン、ポ〜ン、ポ〜ン…

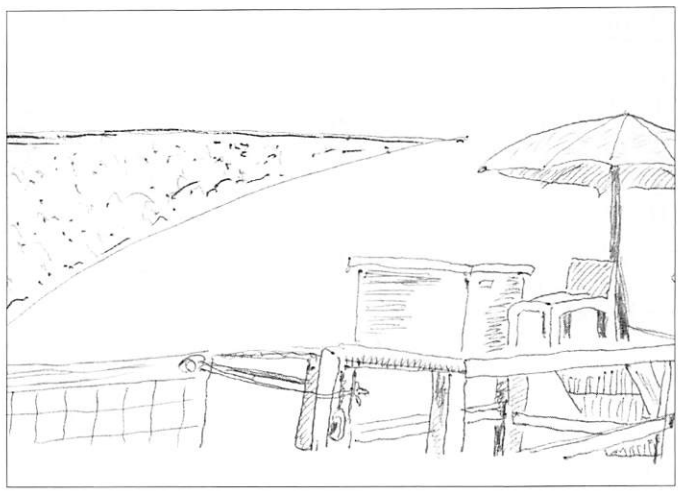
と。同時に自然がさゝやかに動く。

四季こもごもの草花がほのかな香りをたゞよわせながら静かにハーモニーする。池のベンジョゴ(金魚に似た熱帯魚で柳川の堀割だけに生息していた)が台湾藻といったウォーターヒャシンスの間から顔をのぞかせる。

幹のトッペンで群をなすコーゲ鳥どもまでが、バァーカー、バァーカーと、私のヘタなプレーに野次を飛ばす。

夏になるとワシワシの鳴き声で耳がつぶれるようだ。ワーシ、ワーシ、ワシとわめき散らす。

御花のコートでは実に平和でなごやかなテニスの集いができ、練習に熱がこもる。



ヨカやっかんも

トンさんの特別なお計いで伝習館庭球部のレギュラーの面々は、当時、御花あてにロンドンからシーメールで送られてくるラケットや半ダースごとに箱入りのスラセンジャーのボールなどをいただき、心ゆくまで練習にのめり込んでいた。

食糧不足、物資欠乏の戦時体制下にありながら、なに不自由なくトンさんのコートで調整に励むことができた。

御花の恵まれた環境から日本のテニス界のトップへと登りつめた高椋哲夫先輩に続いて多くの先輩たちが桧舞台で大活躍する時代がやって来た。(以下敬称略)

江曲の高口雄一(中50卒)この人こそ戦後の部復活の功労者で、無報酬でコーチに専念され、橋本(高2卒)、安永(高2卒)らの名プレーヤーを育成された。

農業専科の井上一三(中50卒)、大学さんと愛称された立花医師(?卒)、京町の豆腐屋の西宮兄弟(中47・中50)、稲荷町の魚貝の缶詰屋の伜だった田中(?卒)、北町の長善寺の吉弘ボンさん(中50卒)、東京から疎開してきていた銀行屋の次男坊、許斐章司(中53年)のちの西鉄急行電車の車掌になった前原(?卒)、そして私より二歳年上の実兄、三男までがいるという豪華キャスト。

あふれんばかりの若いエネルギーがコートに充満する。若い血潮の集団だった。

その兄さんたちがコート脇でボール拾いをやっている小学生の私に向って

はよ水ば持って来んか!

バケツに氷ば入れて来んか!

ラインば(石灰水)で引かんか!

ローラーばかけんか!

と、次から次に傲慢な注文ばかりつける。

テニスには自分よがりのユニークな性格の人が多い。

でも、なかにはこんな優しい人もいた。

オイ、来んか!

たった二言の台詞だけで、口の重かった高口先輩は私を誘ってくれた。

私の一日の重労働をねぎらってか京町の巴屋うどん店とか越山に連れて行っては腹いっぱいご馳走をふるまってくれた。

この人情味豊かで親分肌の先輩に対しては私の子供心を揺さぶられた思い出がいっぱいである。

御花のコートは伝習館の主力メンバーたちによる組織的な練習の本拠地だったが、戦火が日本の敗戦に向うころの一時期に食糧増産のための農園へ〝様変り〟した。

が、本陣である伝習館校庭内のクレーコートは、終戦直前に米軍機の〝誤爆〟(次回に詳述したい)により一部を損傷したものの、平和な日々が甦るまでそのまゝの姿を残していたのは部員にとって最高の喜びだった。

裏門から入って右、小さな杉林に囲まれた教職員専用の畠の隣にあった。

両サイドに老朽化した木製のポールが立ち、使い古しのネットは〝破れ目〟が多く、打球がいつも通過するスルーと呼ばれるマイナスポイントをとられる破目になるジャッシに往生したもんだ。

バックネットと称する設備は南側の杉板製ボードを除いて全くない。そのため下級生たちの人海戦術でエースやアウトのボールがキャッチされるという超非近代的体制をとったのは貴重な体験だったと思う。

各部による放課後の部活は活気に満ちていた。

たゞ、野球部の練習でレフトが大飛球を追いたけながら、スパイクのまゝコートへ乱入してくるのには参った。

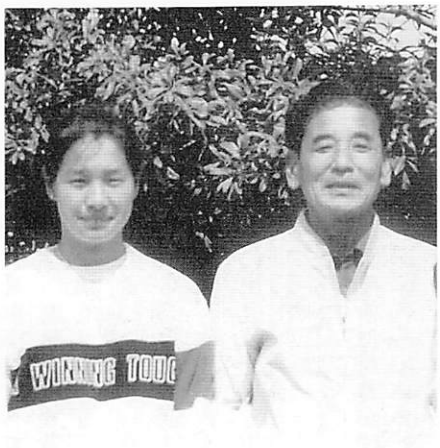
テニス部員一同が汗水たらして地ならしした立派なサーフェイスが一瞬にして無残な穴をあけられるからだ。

丹念に整備したコートが使用不能になってしまう現実を眺め、みんな泣きたいほど口惜しがったもんだ。故意の侵入ではないし、地方予選でトップクラスだった同じ仲間たちの猛練習に対しわれらの反発を抑え、耐え忍んで見過すほかに策はなかった。

審判台は実に見事な創作（右のイラスト）で思考を集約した代物だ。

木製の朝礼台の上に廃棄処分となった勉強机を乗せ、陽除けのパラソルまで設置された豪華な仕掛け。

現代のウイリアムズ姉妹が見てもおったまげて卒倒しそうな偉大な作品と云える。



伊達公子プロと。なんでだろう？

チェアアンパイア、これは国際試合ではもっとも権威ある存在だ。この重厚なセットはワールドテニス界でも採用されるかもしれない傑作だ。

この創作に努力した人物が必ず部員のなかにいる。私はドクター中松クラスの創意工夫に秀れた人材は浦中和夫君（高2卒）を除いてほかにいないとの確信を抱いていた。つねに斬新なアイデアでファスナー付きのラケットカバーなど国内で初めて開発したもの浦中君だったから。製作者が誰だったか現代まで定かではないが、彼ならきっと可能な技術だから。

この審判台をこよなく愛したのが安永富士男君（高2卒）。戦後の学生テニス界をリードした名プレーヤーである。

なんでだろう？

眼の色を変えるほど険しい顔付でボールを追いかけているご同輩らを見て、彼はいつもおどけてみせた。

緊張のすき間にひとたまりの癒しの笑いを求めてユーモラスな行動をとる。彼なりの部員への温かい思いやりなのだ。

頭の芯から飛び出すようなカン高い声で、わざと、

頭ん瘤の出ぇーたー！

コールするではないか？　プレー中の選手たちはその奇異絶妙な〝叫び〟にキョトン。

あたまんコブ？

首をかしげる。当然である。

そこには深い意味がある。安永君は英語でのコールとトーンとリズムがそっくりの日本語を発見して笑いをとったのだ。

Advantege server!

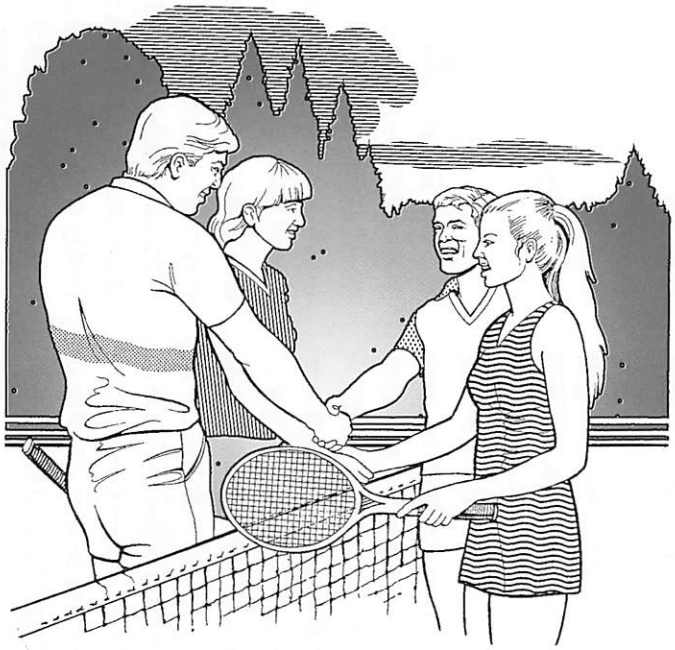
繰り返して読んでください。たどり着くのはやはり〝頭ん瘤〟です。機智にたけた安永君の発想にいつも私は敬服するばかり。

楽しくまとまった伝習館庭球部ストーリーはこのまゝでは終れない。まだまだ珍談・奇談のハプニングは一章だけでは終らない気がしてならない。

ヨカじゃろか？あとは次回のお楽しみに！

つづく

（編注）「高一回卒」にはS24・3高等学校伝習館卒の112名と、S25・3伝習館高等学校卒の305名があり、前者を「高伝一回卒」と略称している「高伝」は一回卒の112名のみで、中56回卒と同級生である。



野球部顛末記

―1点で逃した甲子園―（その1）

高2回卒　山田銀一郎

私は、昭和二十年八月十五日の終戦によって、目標とした剣道と特攻隊がなくなり、良くいう糸が切れた凧や風船のようにフラフラの毎日でした。憧れの伝習館での学業より、毎日々々の過ごし方がどうでも良いようになり、成績の方も急降下の状況となり、勉強より遊びの方が忙しくなってきました。

学校から帰ると空気銃を持って鳥撃ちに熱中しました。収穫は余りなく、野鳩・ヒヨドリ・鴨・雀たちを狙って林や竹藪を徘徊、又城堀を乗り廻りました。労する割には戦果が少なく、絶対撃つなと言われていた女学校の飼い鳩を狙い始めました。夕暮れ時になると、ビックリする程の数の鳩がねぐらである校舎（南校舎）の軒に帰って来ます。こやつを狙う訳です。ものの6、7メートルの高さのため、一〇〇発一〇〇中で、一〇羽位は訳なく撃ち落として大収穫です。意気揚々と持ち帰り、祖父さんの酒の肴に化けたものです。女学校の飼い鳩でなく野鳩と誤魔化しました。

私の遊び場所は女学校の校庭で、良く裁縫室の窓下に爆弾を仕掛けて遊びました。爆弾とはトタンの雨樋を半分に折り、筒の中に水を入れ、これにカーバイトを溶かしたガスが充満するように、筒の先端をボロ切れで栓をし、筒に開けた小さな穴にマッチで点火すると「ドーン」と凄い爆発音と共にボロ切れの弾が飛んでいくという仕掛けです。裁縫室で授業中の女学校の生徒が「キャーッ」と奇声を上げると一緒に蜘蛛の子を散らすようにチンチロマイで逃げます。

小使いさんが来たときは誰もいない、捕まった事は一度もありませんでした。とにかくこの遊びも楽しい思い出の一つです。

〇〇〇〇〇〇〇

城内村というところは、門構えの家が多く屋敷も広く、柴やからたちの垣根があり、今風にいえば高級住宅地で、私の家のような百姓家とは違う風格ある家が多かった記憶があります。私の家にも、孫の為と祖父さんが植えた柿・栗・桃・ブドウ・イチジク・梨・梅・ミカン・キンカン・金柑子・ザボン・ヒワ・ザクロ等の実のなる樹木が敷地いっぱいあり、実が熟する頃は良く生のまま齧ったものです。しかし「家の白飯より隣の麦飯」の例え通り、何か隣の果実が美味いような気がして、桃・柿などの時期になると、昼間実のなり具合を物色しておいて、夜に「夜襲」と称して、木剣と鞄（登校用のカバン）を提げて、人さまの屋敷に潜入し、丹精込めて育てたと思われる桃・柿などを頂戴しました。夜のヒヤッとした冷えた果実の美味かったこと、柿などは、沢山取り過ぎて菱シャンオー売の小母さん（独特の売り声で行商していた）の菱の実と物々交換をしたことも懐かしい思い出の一つです。

中二から中三になりましたが、目的もなく遊びが忙しい毎日でした。中三の組主任は牛シャン（小柳親先生）でした。私の学校内外での素行・行状は、全部牛シャンにバレていました。

〇〇〇〇〇〇〇

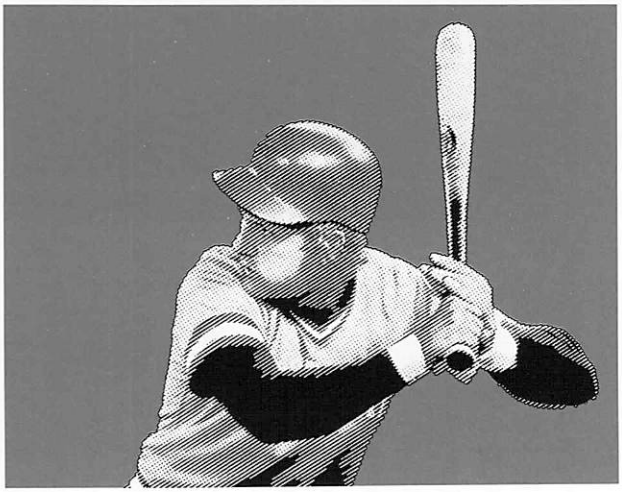
中三の一学期の頃と思いますが、中一の頃シマオさん（中一の時の組主任）から掃除のことで、叱られた時と同じ職員室の横のひょうたん池の周りが、掃除当番の受け持ち場所だったと思います。私は自慢することではありませんが、中二・中三の時は掃除当番が回って来ても、掃除したことは一度もなく、何か文句いう奴がおるなら何時でも言って来いという訳で、横着な少年でした。山田だけが掃除を全然せんとはけしからんという声が誰いうとなく風評となっていたと思われます。

暑い盛りではないかと思いますが、授業も終わり、帰ろうと教室を出かかると、別の組の大和町から来ていたS君が

「オイ！　山田！　お前はなし掃除ばせんとか」

と呼び止めました。

「なんちゃ！　お前から言われるこっじゃなか。来てみろ」
と、廊下のところでS君と対峙しました。放課後で、見物する者は七、八人でした。集まった見物の者に私が
「見せもんじゃなかぞ。わがどんな、関係なか、ハヨ帰れ！」
と恫喝し、S君と一対一となりました。何時もは小刀（小刀を剣先まで切った手製のドス）を持っていましたが、何故かその時はドスでなく、製図用のコンパスがポケットにあり、問答無用といきなりS君の太股を刺しました。
S君、大声で
「アイタクー！　山田から殺される！」
と、職員室に逃げ込みました。しかし職員室は放課後で誰もいないので、私は
「もう、せんけん、ハヨお前は帰れ」



と言うなり、今度は間違いなくバレルぞと急いで家に帰りました。三十分もしない内に、使いとして同級生（名前は忘れました）が家に来て、
「牛シャンが、すぐ来いゲナバイ」
ということになり、職員室に行きますと、
「お前は、何時かはコゲンカコツバすると思うとった。これに一部始終バ全部書け！」
と牛シャンに言われ、S君と二人並べられて、白紙をドサッと渡されました。今にして思えば「始末書」というやつです。S君は長々と書いていましたが、私は三行ばかりで終わり、提出したら、牛シャンが
「山田んとは、何チ書いとるか分からん。字も下手クソやね。もういっぺんヨーット書き直せ」
と言い残して去って行かれました。翌日の午後に家族の誰かを連れて登校せよ、とのことで、母親（ツイ）と一緒に職員室に行きました。館長さんは居られず、今山教頭さんと牛シャンから
「ヨカチ言うまで学校に来んで宜しい！」
と言われました。母は
「人に怪我させるような子ではアリマッセン」
と、何憚ることなく大声で泣きました。私は心の中で――母ちゃん職員室で泣くなよ。オカシカバイ――と思ったことと、S君には済まないことをしたと後悔の念でいっぱいでありました。今山教頭さんか牛シャンからボクボクぶん殴られると覚悟していましたが、家でよく反省するようにとの説教だけで、学校に来なくてもよいということは何やろか？　ぐらいにか考えていませんでした。
翌日、家に友達が来て
「謹慎かい？　ナンチ（何日）ゲナね？　一ヵ月はマチゲー無かろね」
と言う
「オラ知らんバイ。しかし毎日、小使いが日誌バ取りに来るゲナ。オラ書くとは好かんけんね。こりがきつかたい。」
と、学校の謹慎処分をこの程度にしか思っていませんでした。
毎日毎日、朝九時に、小使いさんが家に謹慎日誌を取りに来ましたが、書く内容は毎日同じで＝何月何日、何曜日。午前七時に起床、馬の草刈り一時間、数学・国語・理科・英語を四時間勉強、昼寝一時間、夕食、寝る＝というような日誌を書きました。取りに来た小使いさんが母ちゃんに
「息子さんナ毎日中身の同じ日誌バ出しヨンナハルバッテン、ホンノコツかね？」
と聞いていました。母ちゃんは
「息子バ、信用してハイヨ」
と、毅然として答えていました。
職員室での母の涙と、小使いに答えた母の姿に、少年の私は、母ちゃんに心配は掛けられんなあと、朧気ながら母への絆ができたような気がしました。
謹慎処分は一ヵ月ばかりで終わりとなり、再登校の許可が出て登校しましたが、皆の視線も態度も違う感じでした。その後は良く校内のケンカやもめごとがあると――誰と誰がもめトルバイ――と呼び出しが掛かり、争いの場に出向いておりました。

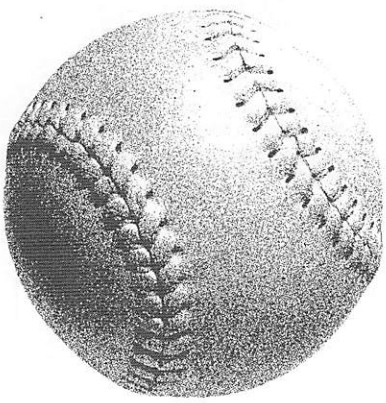
○○○○○○○

二学期に入ったある日、近くに住む小学校からの同級生のK君とH君がケンカしそうだとの情報が入ったので、両君とも良く知っている私が両君の家に行き「お前どんな、ケンカは止めとけ」と話して仲裁したつもりでいたところ、私が帰宅した直後にK君がH君の頭をカミソリで切りつけ怪我させたとのことを、翌日登校して聞かされました。昼休みに牛シャンが
「山田！　あげん言うトッタツに又なんかしたゲナネ。職員室にすぐ来い！」
と、血相かえて飛んできました。ナンジャロカ？　と牛シャンの後についていくと、そこには頭に包帯を巻いたH君とシ

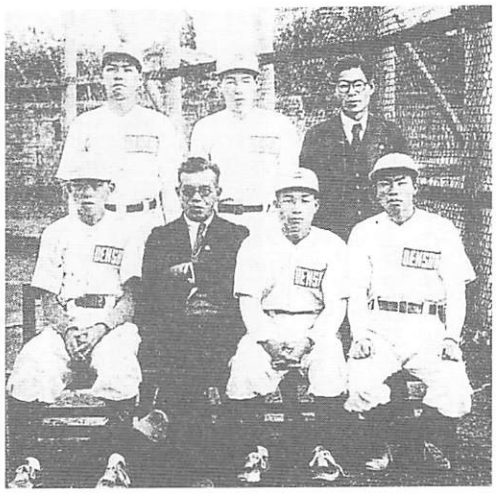
ヨボット下を向いているK君がいました。それを見て私は
「お前ドンナ、やったつか？」
と大声を出しました。牛シャンは
「山田がどうして二人のコツバ知ったトカ」
と言うので、私は
「二人にやめろと言うタツです」、牛シャン「スラゴツ言うな！」反論のしようがない。
後で分かったが、ケンカの少し前まで、現場に私が居たということで、私も呼ばれたとのことでした。
館長室（館長は井上孝太郎さん――後の県の教育長）にK君とH君と、私も一緒に連れて行かれ、長々と館長さんのお説教があり、牛シャンが野球部の副部長であったからだと思いますが、説教の中で館長さんが
「君たちの二年先輩に野球部のキャプテンでショートの石崎君（石崎知見君の兄さん）という選手がおる。運動も出来て勉強も出来る立派な生徒で、みんなの手本にしたい」
と話されました。私は心の中で――ナシケン？　関係のナカ俺が一緒に説教サレヤントカ――と思っていましたが、K君とH君と一緒に神妙に下を向いて館長さんの話を聞きました。
その後、一度その石崎さんという先輩を見てみたいと思うようになりました。帰りしな牛シャンに
「山田、今後は一切もめごとに係わるな！　ヨカカ、分かったか！」
と念を押され、言い訳も出来ず、すごすごと教室に帰りました。

○○○○○○○○

その日の放課後、早速、野球部の練習を見に行きました。城内小学校で一緒だった佐野雍和君は既に選手で二塁手として練習しておりました。
館長さんが言われたショートの石崎さんを初めて見ました。色の白い坊チャンみたいな顔をした小柄な先輩でした。ゴロを取ってから一塁に投げるのが早いこと早いこと、びっくりしました。
一週間程、毎日野球部の練習を見に行きました。小学校の時に剣道の練習を始めようと思った時と同じ気持ちになりましが、野球は竹刀を振り回すだけの単純な運動ではないようだ、身体もコンチョカし、足も飛びきり早い訳じゃないし、勉強も出来ない俺に、野球は無理かも知れんナと、はやる気持ちと不安の気持ちが半々でした。
説教から十日程経った頃、私の前の席に、目玉のキョロッとした東京からの疎開組の白土建二という名の野球部の生徒がいたので、
「オイ白土、野球部に入ろうゴタルが、牛シャンに言うてくれんかい」
と頼んだところ、東京弁で、
「いいよ、言ってやるよー」
と気安く言うので、放課後に白土君について運動場に行きました。白土君が牛シャンに、「山田銀チャンが、野球部に入りたいそうです。お願いします」と言うと、牛シャンが、「オロー、山田が野球バヤ。やめとけ。お前は百姓の一人息子ゲナね。勉強もせんし、ケンカばかりで、学校バやめて家の加勢バしたがようナカカイ？」私は、
「勉強もします。石崎さんのゴタル選手になりたいです」と真剣に答えました。しかし、いわゆる入部拒否でした。私は、覚悟を決めて毎日行ってやれ、と一ケ月程、練習が始まる三〇分前から練習場に行き、他の補欠組がやる道具の搬入・白線引き・水汲み・球拾い等をしました。牛シャンの無視の態度以外は部員の全員から対等に接して貰いました。
一ケ月程して、当時監督をされていた野球部の先輩の玉眞さんの自宅（沖の端の水天宮さんの前の歯科医院）に、誰か迎えに行く者はおらんか、と先輩が言ったのに誰も即答する者がいませんでした。私は「行きます！」と自転車で迎えに行きました。
ヨーシこれで入部許可があるぞと、勇んで行き、玉眞さんを荷台に乗せて一キロ余りをジャンジャン漕いで来ました。



玉眞さんが、
「山田、野球は足・腰ぞ、毎日迎えに来るかい？」
「ハイ！　毎日来ます！」
グランドで牛シャンが、
「オー、お前が行ったか。今後監督迎えは山田の役目ゾ！」
これが、正式な野球部への入部許可でした。
家に帰り、野球部に入れて貰うた、バンと自慢げに話をしました。母ちゃんは
「ゴハンば、しっかり食べんノ！」
と白メシを山盛りについでくれました。
五、六杯を平らげ、ヨーシやるぞ！と決意を新たにしました。
入部後のことは次回にします。（つづく）



卒業記念写真より（向かって右から）

前列――与田竹次（サード／1番）
山田（セカンド／2番）
金子先生（カバさん）
山下邦彦（ファースト／4番）
後列――小柳先生（牛シャン）
古賀　浩（ライト／5番）
佐野雍和（レフト／3番）

○○○○○○○○

「東京星座」より転載

戦後の野球部略年表―伝習館記念誌より抜粋―

○昭和21・4・27（土）	硬式野球部復活
〃　10・5（土）	校内野球大会
○昭和22・11・3（月）	福岡県新人大会で優勝
	野球部後援会発足
○昭和23・8	〃バックネット竣工
	甲子園全国大会の福岡県予選決勝に進出
	延長14回、1対0で小倉高校に惜敗
〃　9・14～17	九州大会出場
〃　9	国民体育大会出場
○昭和24・3・8（火）	選抜高校野球候補校となる
〃　8・10（水）	本校生徒対大牟田軍政部チーム対抗野球
○昭和26・7・15（日）	甲子園全国大会の福岡県予選決勝に進出
	小倉高校に敗れる

小田原時代の北原白秋と「白秋童謡館」

高５回卒　下河秀行

私は東京に来てまだ十年余りだが同郷出身の偉大なる詩人、北原白秋に関する書籍をここ数年集中的に愛読している。

白秋は「邪宗門」「思い出」「真珠抄」などの詩集や「からたちの花」「この道」「青い鳥小鳥」などの童謡、「ちゃっきり節」などの民謡、「桐の花」「雲母集」などの歌集など膨大な作品を残している。

小田原文学館の中にある「白秋童謡館」

波瀾万丈の小田原時代！

その中から、大正七年から十五年までの白秋にとって、波瀾に充ちた小田原時代に非常に関心を寄せていた折、小田原文学館に、別館「白秋童謡館」が出来たというのを知り、早速新宿から小田急のロマンスカーに乗って、神奈川県小田原をはじめて訪ねてみた。

小田原は交通が至便な上、海あり、山あり、川あり、気候は温暖で海の幸に恵まれ、そして空気は美味しいなど自然に恵まれている土地である。

このような環境が文士の豊かな感性を育くむ上において様々な影響を与えたのではないだろうか。

小田原出身の詩人では、北村透谷を始め、福田正夫、藪田義雄、井上康文などいて、小説家では、尾崎一雄、川崎長太郎、牧野信一、北原武夫などがいる。

ゆかりある主な文学者には、北原白秋、北条秀司、谷崎潤一郎、村井弦斉、三好達治、坂口安吾、岸田国士など。

私は再び小田原文学館と白秋童謡館を訪ねた後、白秋が八年余り住んでいたという天神山の浄土宗伝肇寺を訪ねて、当寺院の第三十七世　千葉林定（現住職）夫人と面談することが出来た。

夫人は色々の資料や写真を出して説明して下さり、柳川にも足を運ばれたとのことで、私の突然の白秋についての取材にもかかわらず歓迎して頂いた。

小田原に初の持家「木菟の家」

白秋の生涯で、三崎時代、小笠原時代そして葛飾時代は詩人としての収入では簡素な生活も支えられなかった。

白秋は、色々の事情で三十数回にわたって転居しており、その生涯でただ一度だけ「自分の家」を持ち、長く住んだのが小田原である。

大正七年三月、小田原御幸浜の養生館に仮寓し、のちお花畑に転居している。

この頃鈴木三重吉の「赤い鳥」創刊で童謡の面を担当し、秋には小田原市城山の浄土宗伝肇寺に寄遇、翌八年には同境内に方丈風の萱葺き屋根で、藁壁造りの「木菟の家」を建て、九年には隣接地に赤瓦の洋館三階建を完成させている。

しかし、その新館の地鎮祭での園遊会後失走事件があって二度目の妻、章子と離婚している。

大正七年、長編詩文「雀の生活」が大隈重信が主宰した総合雑誌「大観」に連載が始まると定まって著作原稿料が入りだし白秋の生活を支えるようになった。

大正八年、最初の歌謡集「白秋小唄集」童謡集「とんぼの眼玉」を、大正九年にはイギリス童話「まざあ・ぐうす」を訳し、小説「可路の難」、「白秋詩集」第一巻を出し、大正十年には、アララギの歌人で白秋を尊敬していた佐藤キク（通称菊子）と結婚し、歌集「雀の卵」、童謡詩「兎の電報」、散文集「童心」、「洗心雑話」第三歌集、「雀の卵」などを発表し、家庭的にもようやく充実した生活をすることが出来るように成った。

大正十一年には長男隆太郎（現在　鎌倉在住）が誕生し、歌謡集「日本の笛」、童謡集「祭りの笛」、「砂山」、長歌集「観相の秋」、「空に真赤な」などの「白秋民謡」全十一冊、「蛍と苺」など「白秋童謡集」全九冊を刊行。

大正十二年秋には関東大震災で山荘が半壊し、しばらく竹林生活をしている。

同年には、詩集「水墨集」、「花咲爺さん」刊。「詩と音楽」をもとに「震災記念号」全十三冊を出す。

大正十三年には、短歌雑誌「日光」創刊、大正十四年には、詩文集「季節の窓」刊行し、童謡集「子供の村」を刊行するなど創作活動も盛んだったようだ。

同年六月には長女篁子が誕生している。大正十五年五月白秋は、小田原を切上げ上京、東京谷中に転居する。

白秋の小田原時代は生涯で初めて自分の住処を建築したりして、八年余りに亘って安定した文芸活動の母体となったであろうことは想像できる。

白秋が童謡を創るきっかけとなったのは大正七年、鈴木三重吉の児童雑誌「赤い鳥」に童謡の担当として参加したことで、更に長男隆太郎の誕生で拍車がかかった。

日本童謡史の著者藤田圭雄の調査によると白秋は一一八二編の童謡を残した。

白秋の遺産は永遠である。

小田原「白秋童謡館」開館式に集まった関係者
テープカットしているのは、長男　北原隆太郎氏

「ふくの会」から

高５回卒　野口幹彦

「ふくの会」とは、昭和29年卒の29にちなんで名付けた高5回卒関東同期会のことである。メンバーは関東地区のほか宮城県、愛知県に住む。定年を機に郷里などに移住する人もいて若干減少しているが、現在約90名。毎年一回、秋季に同期会を開催。3年生当時のクラス単位で会の幹事を担当。今年は私たち8組が担当することになっている。

平成10年、柳川本部で同期会全体の第5回卒還暦記念誌「うぶすな」を刊行した。B5判三百ページにおよぶハードカバーの堂々たる記念誌になった。代表の横山一夫君、事務局、江口陽二君、編集委員長の川村友喜君、同窓会役員の本吉湊君ら、多くの関係者の努力の賜である。ページをめくると、私たちが過ごした昭和20年代後半の伝習館時代が鮮やかによみがえる。

また平成12年、関東同期生65歳と西暦2000年記念「ふくの会会報　うぶすな」を刊行した。これは同期の下河秀行君の労作であった。

さて、私どもふくの会には岸栄洋・洋子（近藤）、前原弘毅・昭子（下川）、松永肅・悦子（大村）の同期生カップルがいた。岸君は二部上場企業の役員を務めあげ現在東京同窓会の学年幹事であり、同期会の親分的存在。自宅に囲碁教室を開いており、日本棋院七段の腕前。洋子さんは地域ボランティアのかたわら日本画をたしなむ。昨年には個展を開いた。前原君は昭和50年代にすでに事業を立ち上げ、ベンチャー企業の先がけとなった。しかし昭子さんは平成12年病魔におかされ他界した。残念。松永君は東京同窓会副会長、5回卒にとってはなくてはならない存在。悦子さんは柳川立花藩ゆかりの才媛。数年前柳川の実家で文化財的な貴重な文書が発見された。

というわけで、現在では岸、松永の二組のカップルになったが、健康で文化的な生活がつづいている。

先に紹介した前原昭子さんほかに、平成にはいり九名のメンバーが他界した。森山（広松）照代（平成2）、本村寛治（同4）、塩手（山浦）田津子（同5）、高田弘毅（同5）、鶴真輔（同6）、水落澪木（同8）、古賀健二郎（同8）、北原久仁夫（同11）、古賀学（同13）の諸氏。つつしんでご冥福を祈る。

そこで心機一転、メンバーの絆をより強くよりあたたかくするため、本年の同期会を左記のように開催。正式の案内は9月に発送するが、久しぶりに椅子席の和会席料理を用意して待っている。

高5回卒第23回ふくの会
とき　平成15年10月19日（日）13時
ところ　神楽坂エミール　新宿区赤城元町一―三

追憶のメリナ・メルクーリ
ギリシャあれこれ（一）

高6回卒　岡田哲也

――会報創刊号でご案内した、三稜会（六回卒同窓会）を予定通り三月八日、グランドパレスで行いました。出席者は十八名でしたが、初参加の城戸実、白谷茂満両君に加え、関西から江崎逸夫君も駆けつけてきてくれ、多いに盛り上がりました。

次回からは、西暦偶数年に東京同窓会が開催されるので、わが三稜会は奇数年の三月に実施しようと言うことに全会一致決まりました。そうしますと毎年顔を合わせることが出来るわけです。今回ご都合が付かず、ご出席出来なかった方は、来年から気軽に足をお運び下さい。お待ちしています。

――さて、今回は岡田哲也君に登場してもらいました。岡田君は京大卒後、丸紅（株）に就職。商社マンとして、長期間のギリシア駐在で得た見聞、多彩なギリシア人との交流と通じ体得した事柄などをまとめて、『住んでみたギリシア』（サイマル出版会）なる本を書き下ろし出版したほどのギリシア通です。

来年八月にはオリンピックが、発祥の地ギリシア・アテネで、108年ぶりに里帰りして、開催されます。そのアテネ・オリンピックの日本人ボランティア第一号になった、岡田君に一文を寄せてもらいました。

（学年幹事　石橋修記）

三稜会出席者名簿

池田勝嗣　石橋修　井上弘子
江崎逸夫　大旗哲也　岡田哲也
荻島直紀　川口健寿郎　垪島孝之
城戸実　高口隆憲　古賀譲次
白谷茂満　田中稔　辻綾光
戸上軍治　服部尚子　福山　治子
以上18名（アイウエオ　順）

高6回卒　岡田哲也

傳習館入学後間もなく肺門リンパ腺炎を患い、六か月間の休学を命じられた。結核発病の不安、授業を受けられない焦り、そして友達と会えない孤独感を慰めてくれたのは毎週のように来宅しては励ましてくれた川口湊、白井純一の両君だった。半年しか通学していないのに、二年に進級できたのは担任の岡忠夫先生のお陰である。悲しいことに、このお三方とも今は亡い。

自習の合間に読んだ本の中で、最も印象深かった一冊がハインリッヒ・シュリーマン著「古代への情熱」だった。トロイの伝説を史実と確信し、いつの日かこれを証明するため先ず貿易で財をなし、寸暇を盗んで古代ギリシア語を学び、学会の嘲笑を浴びながら候補地を発掘して遂に遺跡を掘り当てたばかりでなく、その後もミケーネ、ティリンスなど古代ギリシアの財宝を次々に発見するという奇跡の生涯の自伝である。

そのギリシアへ商社の駐在員として赴任し、前後二回、足掛け十二年も暮らすことになろうとは、もとより当時は夢にも思わなかった。

仕事がら来客が多く、休日には取引先を案内して名所旧跡を巡るのも駐在員の役目だった。ギリシアのシンボルのようなアクロポリス、シュリーマンが発掘した「黄金に富むミケーネ」などの出土品を展示した考古学博物館、ソクラテスが真善美を説いたというアゴラの広場などは何百回行ったか数えきれない。

このような観光名所はどこでも入場料が要ったが、日曜日だけは入場無料だった。わけを訊いてみると、

「ここは国民の財産ですから、週に一回ぐらいは…」

とのこと、序でに我々外国人までタダとは流石「ゼウス・クセニアス」（旅人に親切を）がモットーのギリシア人と感心し、日本でも見習ってほしいものだと思っていたら

「なあに、職員が休みたいだけなんですよ」という人もいた。

アクロポリスで忘れられないのは例の「日曜はダメよ」で有名なメリナ・メルクーリさんに、図らずも助けてもらった一件である。

彼女は二十年ほど前来日した時、有楽町の朝日ホールで開催された講演会で、「英国はパルテノン神殿の彫刻群（エルギン・マーブル）を返せ」と熱弁を振るったことがある。

彼女は当時科学文化大臣で、主催者から与えられた演題は「科学技術と人類の未来」だったと思うが、型破りの演説に文句を言う人など誰もいなかった。

二回目のギリシア赴任直前だったこともあり、閉会後、表敬かたがたしばらく歓談させていただいた。別れ際に彼女の著書「わが愛、ギリシャ」にサインして貰い、小著「住んでみたギリシア」に署名して進呈すると、字は読めないけど、写真は読めると言って喜んでくれた。

「ギリシアで困ったことがあったら、いつでもいらっしゃい。あなたにはドアを開けておきますから」

「でも日曜日はだめでしょう?」

ここで大笑いになった。

その時はギリシア人らしい社交家だなと思ったぐらいのことだったが、この一言が数年後思いがけない威力を発揮することになる。

文部省の文化財保護委員会の重鎮で、東大名誉教授の藤岡先生ご一行が遺跡調査のためギリシアに来られたのは一九八九年秋だった。

当時アクロポリスのパルテノン神殿は保存工事のため立入禁止になっていたが修復作業を実地に視察したいと、外交ルートを通じて申し込まれたが断られてしまったとのこと。東大工学部で先生の教え子だった本社の重役から何とかならないかと相談があり、社業とは何の関係もなかったが、アクロポリスに登り工事事務所に頼んでみると案の定、にべもなく断られてしまった。

断られるのが当然で、無理をいう方が間違っている。

「一般開放ではなく、日本を代表する専門家が見たいと希望しているのです。見せて何の害がありますか」

などと粘ってみたが埒があかない。

その時フト思い出したのがメリナ・メルクーリ大臣の一言だった。

「どうしてもだめですか。それではメルクーリさんに相談してみます。」

その途端、所長氏の顔色が変わった。

「メルクーリ大臣をご存知ですか?」

「ええ、古い知り合いです。私の言うことは大抵聞いてくれますよ」

「分かった、分かった、特別許可書を出しましょう」

諦めていた先生は目を丸くして驚喜されたが、メルクーリさんに会う必要がなくなったのはちょっと残念だった。

どこの国でも似たようなものかも知れないが、ギリシアではとりわけ人の繋がりがモノを言う。頑固なギリシア人説得の決め手は契約でも道理でもなく、しばしば力か利益で、わけても人脈は決定的な力だった。

何れお礼をと思っているうちに、彼女は亡くなり、平日もダメになってしまった。

（一）終

ほんに不思議じゃったばんも

高７回卒　田中敬之助

ケータイ

夕暮れ時、近くの路地を歩いていたら、「もしもし、もしもし」という若い女性の呼び止めるような声がした。ふっと振り返ってみる。なーんだ携帯電話で話しているのか。

今や携帯電話の普及はすごい。私も数年前から持っているが、便利なことは便利である。しかし、解らないこともいろいろあった。丁度そのころ、ＮＴＴの人と知り合いになったので聞いてみた「このケータイで、横浜から東京に掛ける場合と、東京に持ち込んでから東京の人に掛ける場合とがあるけど、それはどうやって判別しているんですかね。」「いや、それは同じですよ。」「東京圏というのがあって確か150kmだったですか、その圏内は同じ料金ですよ。東京圏から名古屋圏に掛けると高くなるのですが、それでも、例えば新幹線に乗って掛けていたら、急に名古屋に入っていったような場合、掛け始めたところの料金が継続します。」なるほど解った。

次に解らなかったことは、私の居所をどうして調べるのだろうと云うことであった。九州に居ても、横浜に居る女房からの電話が繋がる。ということは、何千万の電波が私の身の回りを飛び交っているということか。わぁー大変だ！

これは、テレビで解説されていたので、納得できた。九州に居ても、それぞれのケータイが、私は此処にいますよ、と絶えず発信していて、誰かが私のケータイに繋ごうとしたとき、さーっと繋いでくれるとのこと。それだったら、うじゃうじゃ電波が飛び交っていると考えなくてよい訳だ。

今、中国でのケータイの普及は凄まじいとのこと。一億八千万台普及し更に毎月五百万台増加しているとのことだから、この文章が皆さんに届くころには、二億台を越えていることになろう。もともと人口が多いからだけでは済まされない。買うときは月給の３～４ヶ月分を支払っていると聞いた。

発展途上国でもケータイの普及は凄いそうである。私が解らないのは、これらの人達が月々いくらの電話料を払っているのか。

日本人のように、毎月五千円一万円を払っているとは考えられない。よその国があげた人工衛星を使えば、安くて済むのだろう。それでは日本は何故こんなに高いのか？

ＮＴＴの大きなアンテナの数々、人工衛星の打ち上げなど金がかかることは分かるが、こんなに高い料金が本当に必要なのか、私には解らない。（誰か知っている人、教えてよ。）

エスカレーター

横須賀線と総武線とが連結され数年経つ。連結された為に東京駅のホームは地下４階に移った。また、中央線は地上３階である。

私は、この７階（普通のビルだったら10階に相当するくらいの高さ。）を一気に昇り降りすることが多い。といっても大半はエスカレーターを利用するわけだが、可成の時間を要する。

エスカレーターは、急ぐ人は右側、そうでない人は左側と慣習的に分けられている。

時々、お上りさんらしき人達が、二人横に並ぶことがあり、流れが滞ることがあるが、ラッシュアワーでは、そのようなことはまずあり得ない。

ところで、不思議なことは総武線に入って東京駅の次の駅、これは新日本橋駅というが、此処では急ぐ人が左側であり、それが慣習なのである。最初は、此処の人達は臍曲がりばかりだと思った。

これも、後でテレビを見て分かったことだが、関西は急ぐ人が左側だそうな。その理由は、大阪万博の際、大阪では世界各国の事情を調べたところ、急ぐ人は左側というのが大半で、それに合わせたとのこと。それでは東京がおかしいのか？　いや、関東では右側が主流。新日本橋が合わせるのが当然じゃないか。いや、関東が世界に合わせるのが筋じゃないか。いやはや、ほんにややこしかのも。

カイサツ

ＪＲの改札口が自動化されて久しい。最近では更に進んで、プリペイド方式のイオカードとか、定期券方式のSuicaなど改札口も進化してきている。

ここで問題になるのは、大人が子供の切符を自動販売機で買って、入場した場合どうなるかということである。

これは、子供の切符が改札機を通過する時に、改札機の上に設置されたランプがつき、それを駅員が確認するとのこと。ランプがついて、大人が通過していたら駅員に呼び止められるそうな。

ほっほう。私は、それで納得していた。ところがである。先日、立川駅に行ってビックリした。なんと、改札口が20個位並んでいるではないか。こういうところのラッシュアワーでは、駅員がいちいち見ておられないだろうし、発見しても追っかけることも出来ないだろう。（他人の話は、すぐに信じちゃいけません。）

おうめさん

ブリヂストンの久留米工場時代、同じ課にいたA君が、今度は私のいる横浜工場に勤務してきた。聞けば、結婚して7年になるが、まだ子供がいないとのこと。

「A君、怒らんで聞いてくれ。あんた、子供は好きか?」「えぇ、好きですよ。」「よし、そんなら騙されたと思って、鎌倉の〝おうめさん〟という、お宮さんに参って来いよ。」

JR鎌倉駅で降りて、段葛のある若宮大路を横切ると、そこに〝おうめさん〟というお宮がある。通常、安産を願ってお参りするそうだが、子宝に恵まれるお宮さんとも云われている。たいして大きくもないのだが、かなり有名である。

そういう話をしてから、4~5ヶ月も経っただろうか、「出来ました。」とA君は、にこにこして報告に来た。もう、そのときの子が大学を卒業するまでになっている。

この話を聞いたB君という、これまた5年ほど子宝に恵まれなかった男性が、私のところに聞きに来た。そんなに当たるとは思えなかったのだが、これまた同じように説明し、お参りさせたところ、すぐに子供が授かった。

不思議である。こんな事があるんですね。お参りすることで、気が楽になるのかも知れない。

100%保証はしないが、子宝に恵まれない人には、一度参ってみてはとお勧めしたい。

マリオネット

高10回卒　大村平人

恩師

創刊号の「先輩・後輩より」の中で高10回卒大島さんが金時山に登ったときにお兄さんとぱったり出会って目が点になったとありましたが、世の中にはこういうことがあるものなんですね。

もう、40数年も前のことですが、代々木駅で電車に乗ろうとしたとき、顔見知りの二人連れにぱったり出会いました。何と伝習館の1年先輩の方達ではないですか。しかも、「明日、立石先生が陸上の選手を連れて国立競技場へこらっしゃるよ!」とのこと。

翌日は、何をおいてもと国立競技場へ飛んで行きました。伝習館女子陸上部がリレーで全国大会に出場するということで引率して来たということでした。応援しながら、想い出話に花を咲かせることができました。

立石先生は、3年のときのクラス担任、進学に当たって、先生にはいろいろと面倒をかけました。ある晩ラジオの受験組番を聴いていて、○□工大は、物理・化学・数学の配点が高いことを知り、私にはピッタシの大学と思って、後日立石先生に自分の希望校を伝え、相談しました。まだ、伝習館からは誰も入ってないし、お前には絶対無理だからそこはやめておけ、他の大学にしろと指導を受けました。そういう指導を受けながら、田舎者の身の程知らずの無鉄砲で受験したところ、見事不合格でした。滑り止めにも滑ってしまい浪人する羽目になり、3月も末になって予備校を探しましたが、駿台その他選抜試験をする予備校は既に募集は終わり、結局、手続きだけで入校できた代々木の予備校に通うことになりました。

その予備校に下宿先の下総中山から通っているときのできごとで、立石先生が明日来るよと先輩が言い終わるか終わらないうちにドアは閉まりました。その後会うこともなく、今となっては名前も顔も想い出せませんが、先輩に会ったこと、立石先生が翌日上京されると教えてもらったことははっきり覚えています。

広い東京とはいえ、いくつかの条件が重なって偶然に思わぬ人に会うこともあるでしょう。会うだけでも珍しいのに、それがきっかけで恩師立石先生に会えるとは、単なる偶然では片付けられないような気がします。何か我々の力の及ばない、目には見えない何ものかによって立石先生に会わせてもらったとしか考えようのない気がしています。一段と高いところから何ものかに操られていたのではなかろうかと思われてなりません。丁度マリオネットのように。

話は変わりますが、先日、戦艦大和から奇跡的に生還した八杉康夫氏のはなしを聴く機会を得ました。油の海にもまれながら、もうだめだと思ったことは、一度や二度ならず、十度も二十度も思ったとのことでした。その度に奇跡的なことが起き、自分が生還できたのは一度や二度の奇跡なら単なる偶然でしょうが、十度も二十度も重なると、何か自分達の知らないものの力によって生かされているのではと考えるしか考えようがないと言っておられました。

私もまったく同感で、単なる偶然では片付けられないできごとに出会ったことが私だけではないことを知り投稿しました。

ローマにて 2003年春

高14回卒　綿貫直諒

一九八二年九月十六日早朝。

片道航空券で旅行カバンを一つずつ提げ、妻と二人でローマフィミチーノ空港に降り立った日をつい昨日のことのように鮮明に思い出しますが、あの日から早や二十年もの歳月が流れました。

美術学校は出たものの、絵描きとも教師ともつかぬ、中途半端な日々を十数年続け、なんとかこの生温い生活から抜け出したく、「絵」に専念したく、意を決してローマを修行の地と定め日本を離れましたが、これ程長い滞在になろうとはあの時夢にも思いませんでした。

ふり返り見ると瞬く間に過ぎ去った二十年。

くる日もくる日も自然を見詰めながら、ただひたすら描き続けてきました。

にもかかわらずいまだに納得のいく絵は出来ませんが、これからも諦めず描き続けようと思います。

今住んでいますロッカプリオラは、ローマの南三十キロ前後に広がるカステッリ、ロマーニと呼ばれる丘陵地帯の東端に位置し、東にアベニン山脈、西には遠く霞む地中海を見渡す、山上の小さな田舎町です。

近くには、ローマ法皇の夏の別荘のカステルガンドルフオ、白ブドー酒で有名なフラスカーティ、花祭りのジエンツァーノ等々個性豊かな街々が、のどかな丘陵に点在しています。

世の中暗いニュースばかりで暗澹たる思いですが、草を食む羊の鈴の音や、森のカッコウの声を聞きながら描いていると、全てを忘れ、郷里九州をはじめ皆様方のお陰、身に余る恵まれた環境で絵に専念させていただける有難さで一杯になります。

一九八六年からの松屋銀座での個展も、同窓の皆様方の暖い励ましをいただき今秋で九回目を迎えます。

特に同期の皆様からは、毎回素晴らしい祝いの御花や十八才の昔に返る宴席をいただくばかりでお礼の言葉もありません。

今年は十一月十二日から十八日まで開催の予定ですが、皆様に御高覧いただく日を楽しみに、少しでも深みのある絵が出来るよう描き続けようと思います。

ちょっと昔の話ですが…①

夏の八甲田山
—父の威厳は失われた—

高21回卒　白谷政則

中高年の登山ブームが続いている。八年前NHKの〝深田久弥の百名山〟を見ながら、その美しさに惹かれた父の軽い一言「いっちょ登ってみるか」がこのはなしの始まりである。

メンバー（年齢他一九九五年当時）

父　M則　44才　山は高校以来だがゴルフではいつも他の人の倍以上歩いている

母　A子　42才　車にも自転車にも乗らず（乗れず）毎日買物でテクテク鍛えています

長男　M史　14才　中二。学校ではワンダーフォーゲル部に所属。年間30日位山にこもるが身長一五五cm体重三五kgと我家一番のチビ

長女　T美　12才　小六。身体は大きい（一六〇cm、五〇kg）が、何せ小学生、体力が心配である

［1日目］

横浜からA子の実家（秋田県大館市）まで七五〇km、約十二時間、安全運転で無事到着。M則は疲れもみせず、着くなり冷たいビールを飲みながら、「明日の朝は早いぞ！」「弁当は腐らないものにしろ」「水は一人一リットル」「雨具も忘れるな」と指示をし、そして、決して自分で動こうとしない。

［2日目］

A子は朝四時からおにぎり作り（当時秋田にはコンビニなるものはなかった）ちなみに、実家では畑仕事（枝豆収穫の最盛期）で四時起きはあたりまえ。他のメンバーも眠たい目をこすりながら起き出し、朝食を済ませ五時頃出発。途中の十和田湖や奥入瀬渓谷は素通りし、八甲田山麓の酸ヶ湯温泉までノンストップ。トイレ、水の補給等準備もおこたりなく八甲田大岳めざし七時スタート。

ブナの林のなか三十分も歩けば汗が吹き出す。アオモリトドマツの背の低い林になると風通しもよくなり一息つく。さらに三十分、地獄沢で小休止。沢の水は硫黄の臭いで飲めないがタオルを浸し顔や首をぬぐう。汗だくの身体に冷たいタオルが気持いい。沢を渡り左岸沿いに遡るにつれ坂はきつくなり十分歩いてはひと休みを繰り返す。一時間ほどでようや

く小さな湿原（仙人岱）に出る。平担な木道はさっきまでの急坂とちがい歩みも心も軽やかになる。左手に八甲田大岳、真正面に小岳、おまけに冷たい湧き水もあり、文字どうりここは仙人の住処である。澄んだ空気、風の音、森のにおい、自然の空間に身体を投げ出す。高原の風が心地よくゆっくりと休む。

仙人岱を後にし、小岳との分岐を左にとり、いよいよ大岳への登りにさしかかる。森林限界を過ぎるとガレキの道となり傾斜も増してくる。真夏の太陽は容赦なく照りつけ休む回数がふえてくる。ハイマツや名も知らぬ高山植物があるがゆっくり楽しむ余裕はない。M史やT美ははるかかなた「おーい」「お父さーん」上の方から声がする。A子でさえ私の前を歩いているではないか。〝亭主の前を歩くとは何事か！〟と思いつつもM則の足は三歩進んでは立ち止まる。〝こんな筈では〟〝頑張れもう少しだ！〟と心に言いきかせながら進む。A子の大きなお尻も苦しそうだ。途中、鏡沼という火口湖があるが、ほとんど覚えていない。息も絶え絶え、意識もうろう、膝はガクガク。ふくらはぎ、太もも、果てはお尻の筋肉まで使いやっとの思いで頂上へ。A子はグッタリ、T美も口数が少ない。M則は一桁の足し算すらできない脳死状態、M史だけは平気な顔で一年間のワンゲル経験を無言で自慢している（……にちがいない）。喉を潤し十分ほど休憩したら、ようやく昼食をとれるまで回復した。変形したおにぎりも山の上ではおいしい。

山頂からの眺めは、北には青森市街と陸奥湾、西に岩木山・白神山地、南に目をやれば南八甲田の山々が広がり（その後には十和田湖があるはずだ）、東側には足元から火口が大きく落ち込みその向こうに小岳・高田大岳と三六〇度の大パノラマ総天然色である。映画やワイド大画面テレビでもこの迫力にはかなうまい。

眺望を充分楽しんだあと、分岐までの標高差二五〇mを一気に駆け下る。駆け下ったのはM史とT美だけ。登りだけでなくここでも後れをとってしまった。井戸岳・赤倉岳と縦走しようという意見もあったが、M則の独断で却下。楽な毛無岱への直進ルートをとる。毛無岱は大きな傾斜湿原の中に池塘がちりばめられ、花の季節や紅葉の時期にはさぞきれいであろうと想像できる。登りのつらさも忘れ、広々とした草原にのびる木道を担々と進む。八甲田と言えば有名な山であるが、夏休みというのに登山者は少ない。すれ違ったり昼食や休憩の時会ったり、この山域で会った人は百人もいただろうか？　さすが東北の山、静かなものである。あまり人が少ないと熊が心配になってくる。途中、長い階段（下り一〇〇段位）があるが酸ヶ湯まで約二時間、のんびりとまわりの景色を楽しみながら下る。

酸ヶ湯温泉では有名な千人風呂に入りゆっくりと思ったが、ここは人・人・人・湯あたりでなく人あたりでよけい疲れた気がする。とりあえず汗だけは流し実家へ戻る。……とここまではファミリー登山で終わるはずであった。

採りたての枝豆をつまみにビールがうまい。畑仕事を終えた御爺様も加わり山の話に盛り上がる。「ギヅグナガッダガ――？」「ウンダマー、ヴジデヨガッダ」「シャッコイビールッコノンデケレ」「○△□★◇」「∪∀⇔∧？」酔った御爺様の秋田弁は通訳（A子）がいないと意味不明。ワイワイガヤガヤ、そのうち足腰が凝ってきて立ち上がるのさえつらくなり、早々に寝る。

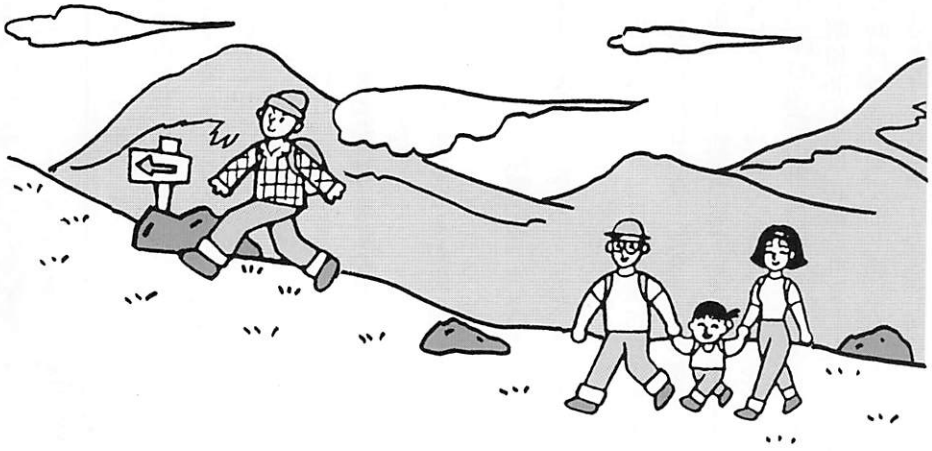
［3日目］

翌朝はもっと悲惨である。筋肉痛はますますひどくなり、足から腰・尻・背中・腕・肩と全身にひろがり、トイレにいくのもつらい。特に和式は大変である。M史やT美は一晩寝たらもう平気な様子。M則だけは一日中身体を動かす度に「あいたったったっ」「ウッ！痛ァ！」結局この日は口と胃袋だけは大丈夫でビールを飲む以外何もできなかった。

［4日目］

今日はUターン。車の運転はどうにかなるが、パーキングで休む度、車の乗り降りが大変である。階段はおろか10㎝の段差さえ全身に痛みがはしる。うしろから見たら壊れたロボットが歩いているように見えただろう。我家に帰ってもぎこちない動きはしばらく続いた。

かくして体力のおとろえを痛感し、つらさ痛さに加え、植物の知識も無く、又花の美しさを愛でる余裕（やさしさ）の無さを家族に露呈してしまい親父の威厳が失墜した山行であった。「いっちょ登ってみるか」という甘い考えを反省し、もっと身体を鍛えて次こそは！　と、もう一度のチャレンジを誓う日々である。



二〇〇三　春　郷愁

高23回卒　坂本　智臣

弁当びらき

春弥生、今日は雲ひとつなく
この春いちばんのぽかぽか天気

「よか天気ね！」
「こげんか日は弁当びらきばすーごたるね」
「すい」
「ばってん、なんでんなかかしれん」
「よかばい、あるもんで、つけもんだけちゃよかばい」
「だっでんで　もえもえするぎっとよか」

「かあちゃん、弁当びらきばするごつなったけん、はよ作って」
「なんでんなかぞ」
「あるもんでよか」

「○○ちゃんの弁当に玉子のはいっとるばい、うまかごたるね」
「たべてよかよ」
「ほんなこてよかね」
「うまかねえ、おりがつもたべて、昨日の残りもんばってん」

四十数年前
幼稚園や小学校の土曜の帰り道
春の暖かい陽射しを感じると
誰からともなく
「弁当びらきすい」と声がかかる

あるときは筑後川の土手
あるときはレンゲ畑の真中
春ののどかな陽光のもと
持ち寄った弁当を広げつまみあう
おなかをみたしたあとの
かくれおん、葦の中の隠ろ家つくり

農家、漁師の家が多く
構ってもらえない子供達の
愉しみのひとつ

学年幹事より

くっぞこ会のこと

高12回卒　橋本寛治

昭和36年卒は首都圏の同期会として「くっぞこ会」を結成しています。

故郷柳川で開催される6年ごとの学年同窓会には東京のメンバーは

①遠いということもあり

②また当時は子育てや仕事で多忙

ということもあって、なかなか学年同窓会には出席することが出来ませんでした。

そこで、首都圏に住んでいる同期生が集まってはどうだろう、ということになり「くっぞこ会」が結成されました。

昭和56年8月22日「台風15号」が関東に上陸した日の夜、記念すべき第1回くっぞこ会が開催されています。出席を予人していた12名が悪天候にもかかわらず、全員渋谷の野島屋に集ってきました。

昭和36年卒は10組ありましたので、高校時代の3年間で同じ組になったのは多くはありません。また高校時代に仲良く話しあった友は少ないのです。しかも20年ぶりの再会です。名前と顔が一致せずどうなることかと心配しましたが、杞憂でした。会った瞬間から「ヤーヤーヤー久しぶり」ということで大変に盛り上がった会になりました。

今後も集まろう。次からは女性にも参加して貰おう。この会の名称は「くっぞこ会」という事にしよう。といった事が決まりました。野島屋の冷房機が壊れて

いて大変に暑かったことが出席者の熱い思いにつながったのかも知れません。

第2回はその年の12月5日でした。六本木のTSKのビストロに男性17名女性12名　合計29名が集まりました。

伝習館では一応男女共学ではありましたが、当時の九州男児は晩稲が多く高校時代には気安く女性と話しをしたことがありませんでしたので、分かるかしらということで全員にネームプレートをつけてもらいました。

故郷とは有り難いものです。同窓生とは本当に楽しくすぐに仲良くなれるものです。特別の企画などは一切準備していなかったのです。自己紹介や近況報告だけです。でも会場予約の2時間なぞ、アッという間に過ぎてしまいました。みんな帰らないのです。自分の家があるのに、そんなに皆さんが喜んでくれました。

この第2回くっぞこ会が大成功したことで以来23年間、毎年会場を替えて多い年には38名、いつもは30名前後が集って、毎回楽しくワイワイと騒いでおります。

どういう訳か毎年の参加者がほぼ男女同数でしかも毎年新しいメンバーが数名出席します。23年間持続したこともあって地元の同窓会にも「くっぞこ会」の存在が知れ渡り、柳川・久留米・福岡・神戸・京都・姫路・愛知・掛川等々からの参加者も出てきています。本当に有り難いことです。

毎年参加ということはなかなかむつかしいことですが、皆勤者もいらっしゃいます。一年おきにあるいは数年ぶりに参加の方もいます。いずれにしても楽しい「くっぞこ会」です。同期生の皆さんどうぞ、ご参加下さい。

高14回卒東京同期会のご案内

高14回卒　吉田節子

同期の綿貫画伯の帰国個展（十一月十二～十八日、銀座松屋）に合わせて東京同期会を十一月十四日夜（金）に開きます。詳細は後日連絡いたします。この同期会も既に二十年ほど続いていますが、途中から綿貫兄の個展の際に開いています。回を重ねるごとに新顔も増えて会を盛り上げています。この案内を読まれた方で初めて出席される方は下記までご連絡ください。名簿作成上、住所変更などがある方もご連絡下さい。還暦まであと1年程度の年齢になりましたので、久しぶりに同期生と顔を合わせて若返る機会としましょう。（幹事・中ノ森）

連絡先

☎　03―3501―9841（勤務先）
FAX　03―3501―9843（同）
携帯　090―2220―0310
☎・FAX　045―973―7340（自宅）

高20回関東地区同期会

高21回卒　白谷政則

高20回関東地区同期会

日　平成十五年九月二十七日（土）
時　午後一時から
場所　未定（山の手線沿線）

詳しくは、七月頃皆様へ連絡します。

幹事　青木（原尻）みな子
井口（古賀）ちづ子
海東（吉田）信子
高巣　和登
白谷　政則

高20回同期会（予定）

日時　平成十六年一月三日（土）
場所　柳川　お花

幹事代表
野口　豊　094―33―0452

案内状は、秋頃発送の予定です。帰省する方は、同期会に合わせてスケジュール組んで下さい。

伝習館東京同窓会のホームページを作成しました。（山口英治　高35）

ホームページアドレスは以下の通りです。

http://www.asahi-net.or.jp/~dv4h-fior/densyukan.html

YAHOO等の検索エンジンで「伝習館」と入力すれば探せます。

それでも「見つからない」という人は管理人の山口　cafe.yama@ak.wakwak.com　まで、メール下さい。

募集中！

1. 表紙絵・表紙用写真
2. 原稿―伝習館ＯＢならダッデンヨカバンモ

○テーマ―自由（同窓会報にふさわしいもの）
小説・随筆・詩・短歌・俳句・川柳、絵画・写真・絵手紙、書など
○字数制限なし（極力四〇〇字詰め（20×20）原稿用紙使用）
写真・絵・カット添付可
○表題・投稿者氏名・卒業年度・総字数を書いて下さい。

―原稿送付先―
〒344-0032
春日部市備後東8-8-32
伝習館東京同窓会　小野　善睦　行
☎・FAX048-735-2431

広告募集

チラシ広告
対象＝東京同窓会会員向けに製品・商品営業内容をＰＲ、販売したい方。
○チラシ三千部を作成し（フォーム自由）事務局宛（裏表紙参照）送付下さい。会員への会報送付時に同封郵送します。
○広告代金＝一件につき弐万円を賛助金として頂きます。
今回第2号には、「有限会社丸川海苔」「千鳥屋」さんよりお申込みを頂きました。
会員の皆様からも、希望業者の方をどしどしご紹介下さい。

（訂正）創刊号10ページ「ご提供品リスト」欄の「新井禎一」さんは「荒井禎一」さんの間違いでした。お詫びして訂正します。

編集後記

○心配しておりました第2号も皆さんのご協力により、魅力的且つ興味深い玉稿が沢山集まりました。紙数の関係で第3号に繰り延べさせて頂いた分もあります。ご投稿者の皆さんにお礼とお詫びをし、ご了承頂きたくお願いします。
○幹事会で、創刊号の水泳部・陸上競技部に続き他の運動部の活動状況も掲載したら…というリクエストがありました。創刊号と違い、多少個人的色彩が濃いかとも思いますが、なんとも魅力的な、笑いと涙とが溢れて来るような野球部とテニス部に関する文章を載せることができて、ご期待に添えたかと思います。
どちらも連載で、第3号以下も又楽しみです。横山さん、山田銀ちゃん有難うございます。
○北原白秋、檀一雄等郷里の大先輩のこと。皆さん余りご存知ないかも知れませんが廣松渉のこと。伝習館の会報に相応しい、それぞれの知られざる一面をお知らせ出来て喜んでおります。適切なご投稿を賜りました皆さんに感謝します。
○引き続き沢山のご投稿をお待ちしております。6ヶ月毎の発行が軌道に乗れば、頂いた原稿をそのタイミングに合わせ紹介して行けます。何時でもご送付下さい。
○報告しておきます。会報発行の都度、編集委員会を四回から五回、江崎会長の紹介で日本橋クラブで開催しております。
毎回、委員の昼食代、交通費などは各々自己負担でやっております。
殆ど毎回、原田副会長からは千鳥屋の銘菓を頂いて恐縮しております。多謝。
○現在の編集委員は次の通りです。
小野　善睦（高2）
内山　秀生（高10）
永倉（跡部）素子（高10）
会長　江崎　正直（高2）
副会長　松永　肅（高5）
〃　原田（立花）万紗子（高13）

発行責任者　江崎正直
〒156-0043
東京都世田谷区松原3-39-25-801

伝習館東京同窓会会則

平成14年7月21日

（名　称）

一　本会は伝習館東京同窓会と言います。

（目　的）

二　本会は会員相互の親睦と融和を図ると共に母校の発展に資することを目的とします。

（事務局）

三　本会の事務局は次の場所に置きます。
〒170-0003　東京都豊島区駒込三丁目3番9号　千鳥屋　内
伝習館東京同窓会　事務局

（事　業）

四　本会はその目的を達するため以下の事業を行います。
1　総会の開催　2　同窓会誌の発行
3　母校事業の後援等　4　その他本会の目的達成に適切な事業

（会　員）

五　本会は福岡県立伝習館高等学校、中学伝習館、柳河高等女学校、高等学校伝習館（含む併置中学校）、柳河女子高等学校（含む併置中学校）卒業生並びに一時在籍した者を以って会員とします。

（会　計）

六　本会の会計は会員の会費、寄附金品等を以って運営し、毎年1回、幹事会においてその収支を監査します。

（役　員）

七　本会には以下の役員を置きます。
1　会　長　1名　2　副会長　2名以内　3　事務局長　1名
4　幹　事　若干名　5　会　計　2名

（役員の選任等）

八　会長は幹事会の推薦により総会で決定し、副会長並びに事務局長及び会計は幹事会で、幹事は各卒業年度の会員の互選により2名以内を各選任します。

（役員の任期）

九　役員の任期は4年として、その再任を妨げません。

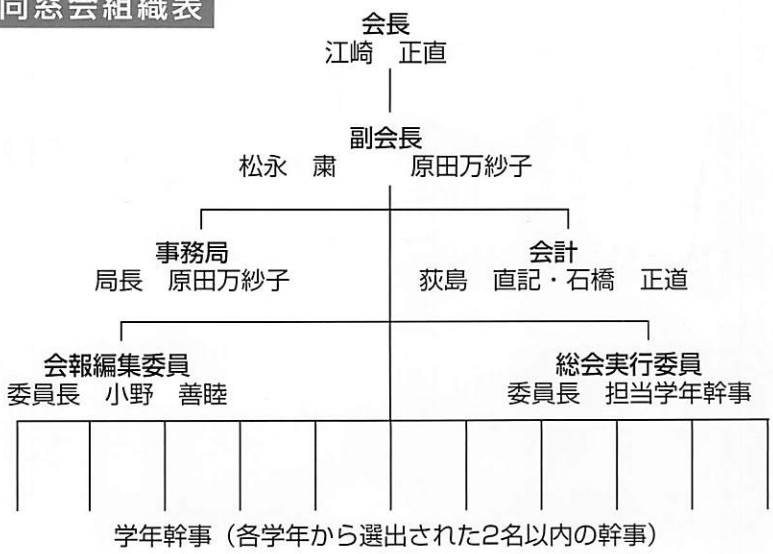
（総　会）

十　総会は2年に1回開催します。会長は総会において会計を報告します。

（付　則）

十一　本会則は総会の決議により改定出来るものとし、本会に必要な細則は幹事会で別途定めます。

東京同窓会組織表



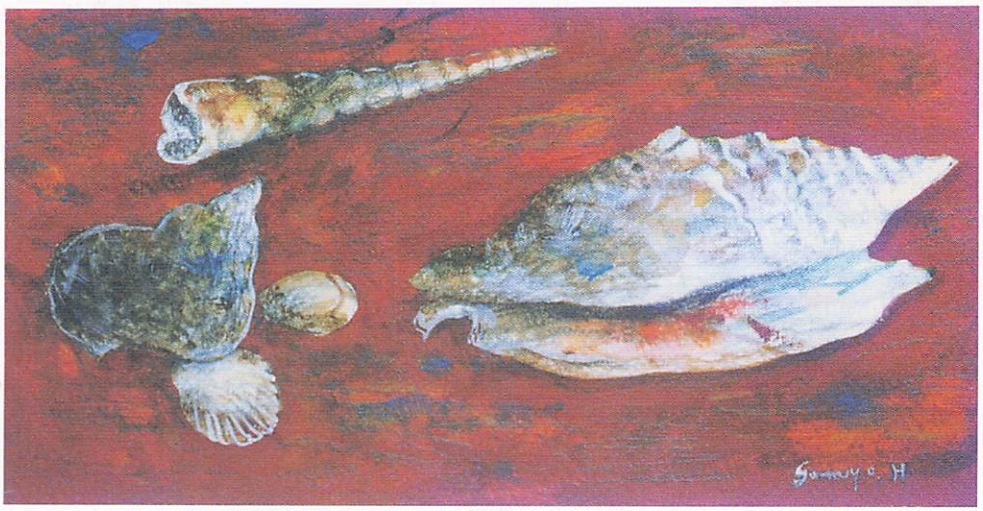
会員数　2608名
学年数　129学年
学年幹事数　57名
（33学年）

「内　訳」

中学伝習館	37学年	237名
高等学校伝習館	1学年	16名
併置中学校	2学年	15名
柳河高等女学校	29学年	213名
教員養成科	3学年	10名
柳河女子高等学校	1学年	3名
併置女学校	2学年	18名
伝習館高等学校	53学年	2096名

会員の移動は事務局までご連絡下さい。

平成14年7月21日　現在



伝習館東京同窓会事務局

〒170-0003　東京都豊島区駒込3丁目3-19　千鳥屋方

TEL 03(3915)0865　FAX 03(3918)8139

http://www.asahi-net.or.jp/~dv4h-fior/densyukan.html